

百日の記

紺野夏子

「ほんにきたのうて、くそうして、たまらんかった。でも、あき子さんは助けるて、きかんで。あの人が本気出したらだれもとめられん。黒人の兵隊を家に入れるなんて、いくら戦争に負けたていうても、そこまですることはなかったよ」

百二歳のミネさんは一息に言うて、組んだ両手をのせた胸をほおと上下させた。

私は湯呑を取りミネさんに差し出した。背を上げたベッドの上で両手を伸ばし受け取ったミネさんは、首だけ動かして唇をとがらせ、お茶をすすった。喉の皺がじわじわ動いて、温いお茶がミネさんの食道を下りていく。

以前はふくよかだったミネさんの体は、合わない間にず

いぶん縮んでしまった。

他人ではあってもミネさんは、実の祖母のように、いやそれ以上に大切な人のはずだった。百歳になってもミネさんは元気である。食欲もあるし自分で歩くし、頭はしっかりしているし。他の人が死んでいても、ミネさんだけは大丈夫とどこかで思っていた。ミネさんは確実に弱っている。いくら丈夫なミネさんでもいつかは死んでいく。当然のことを目の前にして、私は会わなかった月日を数えながら、淡い後悔を覚えていた。

ミネさんの顔の皺が深くなり、左右に大きく開いた。笑っているのだ。

「あなたは、あき子さんのお気に入りだったもんねえ。自

分に似てかしこうてすなおで、なんで、学校の先生にならんじやったかて、大学まで出てから、惜しか惜しかて、死ぬまで言うておいでた」

土産の白玉まんじゅうが効いているのだろうか、ミネさんは機嫌よく、穏やかに昔話を続けている。特別養護老人ホームの担当者から、最近のことは怪しいのですが、昔のことは素晴らしく覚えておられますと、伝えられたのは本当だった。

一世紀を越して動き続けるこの頭脳は、私の知りたいことを教えてくれるに違いない。やって来た甲斐があったというものだ。用がなければ足を向けない都合の良さを自覚しながらも、私の心は弾んだ。

本家の裏山の洞穴から人骨が出たと、地元の警察から連絡があったのは、ひと月ほど前だった。頭骨の形状からアフリカ系と思われる人骨で死後五十年は経過していると聞かされて、ある場面が脳裏に閃いた。

私がまだ独身だった頃、病床の頸子伯母と看病するお手伝いのミネさんが話していた。

——夢に出てくるときがある——

——ほう、アレックスさんな、どうしておられます？——
——まっ白い歯で笑ってねえ。歯ばっかり見えて、あとはまっくら——

二人はひそひそと笑った。闘病中の伯母の辛い姿ばかりを見ていた私は、廊下に漏れる笑い声に、伯母の好物の桃をのせたお盆を持つ足を速めた。部屋に入ると笑い声は消えて、二人は肩を寄せ開け放った障子の向こうの風に揺れる赤い百日紅を見ていた。

——なにを笑っていたの？——

私の問いに何も答えず、二人はガラス鉢の桃に視線を向けた。きれいな桃ねえ、よう冷えてるみたい。伯母は声をあげ、ほんに、とミネさんもことさらに声を合わせた。何も笑ってなどいない。暗黙に打ち消している伯母の口調がざらりとした後味の悪さになって、二人が桃の味をほめればほめるほど白けた気分になった。どうやら、私は聞いてはいけないことを聞いてしまったらしかった。話の仲間には入れてもらえないらしかった。

伯母と私の間に秘密などないはずだった。伯母のお気に入りのお茶を、ミネさんは一目も二目もおいてはいるはずだった。私を抜きに、二人だけで内緒話などあり得ないはずだった。大学を卒業したばかりで、まだ複雑な大人の世界のことなど知らなかった私は傷つき、伯母を問い詰めたと思うたが、伯母の病み衰えたありさまは頼りなげでいたわしく、果たせないままにその思いはやがて消えていった。

伯母は六十五歳で逝った。子供のいない伯母の遺言で本家の相続人になった私は、結婚し妊娠中の身で、高齢だっ

たがまだ元気で身寄りのないミネさんにそのまま本家に住んでもらい、諸事全般を取り仕切ってもらうように頼んだ。もとより、若いときから本家に入り、伯母の一生を共に生きたミネさんであれば、すべてのことを心得ていて頼もしく、私は指図どおりに動いていれば良かった。

伯母の十三回忌がすんだ頃、ミネさんの様子がおかしいと開業医をしている遠縁の叶孝三さんから連絡があった。祖父も伯母も亡くなるときは叶家によって看取られて無事に黄泉の国へ旅立った。四代目の孝三さんは、本家に一人住まいを続けているミネさんのことも気にかけてくれていたのだが、仏壇の前で独り言を言い続ける様子が普通ではないという。本家を動かこうとしないミネさんの説得に苦勞している最中に、台所でボヤ騒ぎを起こしたり失禁したりして、遂に観念したミネさんは老人ホームへ入った。九十三歳になっていたミネさんは、入ったすぐからその施設で二番目の高齢者になった。

多少衰えたとはいえ、ミネさんの前歯はまだしっかりしていて、硬いタケノコをばりばり噛み砕く。お通じも良い。口も達者で、ホームの「若い人」たちよりもずっと言うことがしっかりとっている。頼もしくもあり、恐ろしくもある。ついでに言う、ミネさんは肉を食べない。牛乳も飲まない。四足のは口にしない。近くの畑で採れた野菜を多く食べ、魚の干物を好み長年使い込んだ小さな顎で目刺し

を骨ごと噛み砕く。本家の裏山に続く山地に湧く地下水で作った豆腐が好物で、訪ねるときは必ず持参した。

ミネさんは長い間、本家の仏間で祖父母や伯母の位牌とともに暮らした。ミネさんが老人ホームに入ると、あとには朽ち始めた本家の広い屋敷が残った。仏間と台所と風呂場とご不浄だけにミネさんのぬくもりを残して、あとは古い家具や雑器や古着が積み重なった廃屋が、時折吹く強風にあおられてひゅうひゅうと鳴いている。

二人の子供が相次いで大学へ進み、子育てが一段落した私は、ようやく本家とじっくり向き合う余裕ができた。が、さて、百年は軽く超している持ち重りのする空き家をどうしたものか、良い考えも浮かばないままに、急を要するこどもでもなしと先延ばしにしていた。

裏山の洞穴から人骨が出たという知らせは、電流のように私の全身を駆け抜けた。あの若い日の、伯母の病床での二人の会話が一気に蘇った。歯ばかり白くてあととは真っ黒というのは、黒人のことだと閃いた。まさにアフリカ系の頭骨の人に違いなかった。

では、そのアレックスという人は死んで、ご先祖ゆかりのあの洞穴に葬られたのだろうか。なぜ洞穴などに……。

「朝鮮戦争が終わった頃で、至る所に米軍基地があり脱走兵も多い時代で、その一人が行き倒れたのでしよう、事件

性はないと判断されました」——警察からの話でひと安心したが、一方で、それはそれとしてあの会話の真実を知りたいという強い衝動が湧いた。

一冊の古いノートがあった。伯母が亡くなった時に遺品を整理して見つけた、「百日の記」と表紙に記されたノートで、開けてみると日記のようになっていた。伯母には日記をつける習慣はなかったはずだった。不思議で、どことなく秘密の匂いのあるそのノートは、初めての妊娠と本家の法事が重なる忙しさの中で読むには気が重く、伯母の残した風呂敷に包んで自宅の箆筒の奥にしまいこんだ。あれを読んでもみよう。そして、今度こそミネさんに聞いてみよう。百歳を過ぎてはまだしっかりしているミネさんだもの、きっと覚えているに違いない。

弛んだ私の心身に久しぶりに力が漲った。

「ねえ、ミネさん、昔、本家に黒人の兵隊さんがいなかった？」

久しぶりの面会上機嫌のミネさんに、私は恐る恐る切り出した。

「ああ、おったよ。だれから聞いたとね？　これは内緒ごとだったけど、もう時効じゃろうから……」

ミネさんはあっさりと話し始めた。ミネさんに聞いた話は、伯母の「百日の記」の初めの部分と一致した。

一九五×年　○月○日

今日、脱走兵を助ける。山越えしたらしく、泥のように汚く怪我をしている。一昨日から、裏庭に変な臭いがするし、納屋の唐芋がなくなっているとミネがさわいでいたが、その犯人が分かった。井戸の傍でイチが捕えた。近付くと、獣肉の腐りかけたような臭いがして吐き気を催した。脛に怪我をしていて蠅がたかっている。なにやら呻き井戸をしきりに見るので水を出すと、いざり寄り口を開けた。歯の白さが際立っている。浴びるように水を飲んだ黒人兵はそのまま地面に転がった。ずいぶんと若く痩せている。かなり疲れているらしい。あまりに汚いので全身に水をかけて洗う。イチとリヤカーで西の蔵に運び、孝彦を呼んだ。

イチとは、その頃本家にいた使用人で、私の子供の頃の記憶では一日中ひなたで煙草をくゆらせている静かなおじいさんだった。耳は聞こえるが話せない人と聞いていて、穏やかに澄んだ目を向けられると、なんだか温かな気持ちになり、子供の私はイチさんに近づいては笑いかけていたものだ。孝彦は、開業医の叶孝三さんの父親で同じく開業医をしていた。頭子伯母の幼馴染でもあった孝彦さんは伯母と呼ばれて、脱走兵の手当てをしたのだらう。

○月○日

ようやく目覚める。粥を出すと鼻を近づけて妙な顔をすする。ライススープ。言ってみると、スプーンを取り食べ始めた。梅干しは吐き出す。土鍋一杯の粥を空にしてまだ物欲しそうな目をしている。幼く澄んだ目が馬の目を思わせる。いきなりたくさんは食べさせないようにと孝彦に言われているので、もうないと首を振った。

こわいとミネは言う。私は本家を守るものである。であるならば、洞穴に逃れて来たものを大切に遇しなければならぬ。それが、敵の追跡から逃れて洞穴に隠れ住んだ先祖を持つものの、祀り方だと教えられた。何を怖がることがある。ミネは蔵に近づこうともしない。やむを得ず、この脱走兵の用は私が果たすことにする。幸いイチはミネと違い平静である。イチがいなければ何事も進まない。男同士なのも幸いして、私が留守の間でも安心して任せられる。

名前はアレックス、十九歳。何故ここに来たか聞き出すと、私の英語もよくわからないらしい。英語教師仲間でも発音の良さで通っているはずなのに。知恵遅れかとも思ったが、それでもない。アメリカの南部辺りの出身なのか。ネイティブは難しい。

家に来てきて頼子伯母と私の母と信之輔叔父を育ててくれた。私にとっては病弱だった祖母の代わりとも言うべき人だった。白玉まんじゅうは、早く親元を離れたミネさんのソウルフードなのだ。

「ミネさんは、おじさんのピアノをきいたことある？」

「そりゃあ、あなた、子供の頃はいつつも弾いて、うるそうて、旦那さんはやめろて怒ったけど、奥さんは聞く耳持たんで、信之輔さんの良いことさせて。遅うできたあとと息子に舐めるように甘やかして、学費のかかる東京の大学に行かせて。僅かになった本家の身代ば食いつぶして、けっきょく洋楽狂いして、アメリカに行つてしもうて」

「おばあさんは病気があったから、だれも逆らえなかったのよねえ。小さかったけど、わたしも怖かったもん。弟なんか、小学生くらいまでミネさんが本当のおばあさんで思ってた」

「あなたの弟の俊ちゃん、信之輔さんのこまか頃にそっくりで、ほんなごとかわいかった。泣き虫の甘えん坊たい。今はアメリカの会社におるて、血はあらそえんねえ」

弟の俊一は外資系の会社に入り、頻繁に太平洋洋を行き来している。帰省することは減多にない。たまに会うと、アメリカナイズされた振舞いに、別人かと思うときがある。

「あき子さん、自分の甥ごを思い出しておらしたとよ。

弟の信之輔さんが、黒人と結婚してハワイにおらすでしようが。子供ができたていうて、写真がおくつてきたとよ。くろうしてまあるか頭の子が二人で笑っていた。かわいかねえ、けど、ほんに歯のしろかて、二人して笑うた。奥さんな、目の太いきれいか人で、美人の黒人を初めて見た……」

ミネさんは入り口に私の姿を見つけると、手招きして椅子に座らせ、話し出した。覚えておくことを早く話してしまいたいと意気込んでいるようで、私もそれからそれからと、急かしたくなる。できるだけ本人の負担にならないようにお願ひしますと、ホームに着いて面会を申し込むときに言われた。

一昨日おいでになった日は興奮して、なかなか寝付けませんでした。ご本人が会いたがっていますからお断りはできませんが、長くなりませんように、できるだけ穏やかにお話しくださいるようにお願いいたします。

その言葉を思い出しながら、一息入れてもらおうと湯呑を差し出す。今日も白玉まんじゅうを持ってきた。柔らかな艶つやした白い玉を、ミネさんと向かい合つて一つずつ口に入れる。ミネさんはこの白玉まんじゅうが名物の、川沿いの田舎町で生まれた。十歳になるかならないかで祖母の実家に子守奉公に出たそうだ。祖母の結婚とともに鼎本

信之輔叔父は大学を中退して、アメリカの楽団に同行して渡米した。戦後まもなくの頃だ。それからハワイに落ちていて家庭を持ち、ホテルのピアノ弾きをしていたそうだが、先年亡くなったと知らせがあった。帰国の意思はなく相続を放棄した、本来は跡取りだったはずの叔父には、一度も会ったことはない。二人の子供の後にもう一人男の子が生まれて、その子は日本の大学に入り、研究者になってその大学に勤めている。日本大好きな従兄弟は叔父の家族を代表する形で、伯母の法事に顔を出している。多少の親しみは感じている。彼は黒い肌ではあるが、とても東洋的な静かな佇まいをしている。正座もできるし、般若心経も唱える。驚くと、専門ですからと微笑んでいた。笑うと伯母の面影が浮かび上がり、私は訳もなくうろたえた。叔父は伯母とよく似ているのだろうと思つた。

私の母は伯母とあまり似ていない。容貌も頭も姉に劣っている。幼い頃から言われて育つたそう、高校を出ると故郷を離れて進学し、サークルで出会った父と結婚した。

決して仲が悪いというわけではないが、母は本家や伯母に對して一定の距離を置いていた。幼い私が伯母に懐くのを手放して喜んではいなかった。長い休暇になると、私は弟と二人で宿題や着替えをリュックに詰めて本家に行った。教師をしている伯母が勉強を見られるし、ミネさんの五目飯は天下一品だし、自然がいっぱいで廊下で鬼ごっこが

できるような広い本家は魅力的な場所で、少し年上の孝三さんや近所の子供たちとも仲良くなった。母もいつとき子育てから解放されるので機嫌が良かった。

脱走兵のアレックスは順調に回復し、匿われていた西の蔵から出て、屋敷内を動き回るようになる。イチさんはアレックスとともに西の蔵で寝起きして、夜昼となく世話をした。話せないイチさんと日本語を話さないアレックスとは、身振り手振りで意思をかわせ、心を通わせていった。「百日の記」には、この頃の様子が克明に記されている。

○月○日

西の蔵に行く戸が開いていて、アレックスの鼻歌が他所から聞こえてきた。見回すと菜畑の傍に立っている。杖にすがり体を揺すりフンと拍子を取りながらイチの後をついていく姿は、まるで子供が父親の後を追っているようで、思わず笑みがこぼれた。イチが私に気付いて慌てて畑から出てきたが、そのまま作業を続けるように言う。それでなくてもアレックスの世話でイチの仕事は滞りがちになっている。西の畑にまず人は来ないので、他人の目に触れる心配はないが、外に出していたとは驚いた。いつも一緒にいるイチにしてみれば、出たいとせがまれば情にほだされもするだろう。どうやら初めてではなさそうだ。

西の畑までなら出てもいいが、決して表には行かないように、米軍が来ると言っておく。

「あき子さんな、アレックスを母屋に上げておらしたと。あたいに右太衛門の映画ば観に行かせて、その隙に、信之輔さんの部屋にアレックスば入れて、二人して信之輔さんのレコードばかりかけて、おどりよらしたと。おそろしか。だからすけたらいかなんて、言うたですよ。ろくなことはなから。けがが治って元気になって、それからどこに行けるとですか？ どこに隠れてもいずれ米軍につかまるだけでしょうもん。捕まったら拷問されて、あき子さんのことも喋るにちがいなか。そしたら、どんな仕打ちばされるか、おそろしゅうして、体の震えるごたつた。あたいをだまし討ちにするようなことばして。あき子さんな、そんなことをする人じゃあなかつた。アレックスがきてから、おかしゅうなつた。イチさんな、アレックスを息子のように連れまわして、田植えの手伝いも、どうろこうろですますし。あんなイチさんも見たことはなかつた。こんなことで今年度の米はどうなるでしょうて、あき子さんに言うても、大げさに騒ぐなどいわれるし、何十年てつとめてきた者より、あのだこの馬の骨かわからん黒人が大事かかて、腹が立って、もう、この家にはおられんと思うたよ。ばってん、行くあてもなかつたけん……」

一番大変な思いをしているのはイチなのだ。当然言葉はないが、顔を見ればどれだけ気苦労が多いかわかるし、白髪も増えている。けれども、イチは楽しそうにも見える。考えてみれば、日本語を話せないアレックスは話せないイチと同じようなもので、二人の不自由には通じ合うものがあるのだろう。

アレックスは信之輔の高校生の頃のズボンを着ているが、まるで半ズボンである。シャツを与えても暑いとすぐに脱いでしまう。浮き出ている胸の骨が消えてだいたい肉付きが良くなったが、瘦身であることには変りがない。見るたびにその手足の長さに見とれる。美しいとも思える。心地良げに午後の目を浴びて、杖に身を寄せて立っている姿を見ていると、先日学校の映画鑑賞会で観た、アフリカの草原を駆け回って狩りをしているマサイ族の勇者を思わせる。痩せて敏捷そうな体と長い手足は、動物を追って軽々と野山を疾走するだろう。黒い肌は土が似合う。兎でも見つければすぐに追いかけて行きそうだと思っていると、鶏の鳴き声がして、慌ててイチにしがみついた。オムレッツは好物だが鶏は嫌いらしい。見つかる前に鶏小屋で卵を盗もうとして酷い目に遭ったらしい。腕に嘴で突かれた痕があったし、足の傷に鶏の毛が着いていた。肩辺りまでしかないイチの背に隠れる様は滑稽だ。臆病なものだ。案外小心者で、それで軍を抜け出してきたのかと思う。

ミネさんの目尻に涙がにじむ。つい昨日のこのように怒りが蘇ったのか、胸が大きく上下する。興奮させないでと念を押されていたのに、つい、聞き入ってしまった。

一生を真面目な独身の教師として通した、私の知っている頭子伯母とはあまりにかけ離れた姿に言葉が出ない。本当なのだろうか。思い違いではないのか。私は知らず知らずミネさんの話を疑っていた。いくらしっかりしているとは言っても、百二歳だもの。アレックスが嫌いで、大げさに言っているのではないか。手を握って体を寄せて踊っていたなんて、ミネさんが映画を観に出かけていた間のこと、見てはいないだろうに。

言いたいと思ったが、これ以上興奮させて面会を断られたら元も子もないしと、我慢した。反論はせずに、頷きながら聞いておく。これが機嫌よく話してもらおうコツなのだ。ミネさんの胸が次第に鎮まって、小さな寝息が聞こえてきた。

ミネさんの涙をハンカチでそっと抑え、私は立ち上がった。

ミネさんのいる老人ホームは、本家とは一キロほど離れた同じ町の東部にある。ミネさんを訪ねた後で私は本家に寄り、仏間に入る。戦後の農地改革で多くの田畑をなくし、幾つかあった持ち山も少しずつ処分し、先祖ゆかりの洞穴

のある裏山とそれに続く本家の屋敷だけが残った。

山地の南麓にある集落の土地は、市街地から遠く離れた不便な場所、開発の手も届かず、今ではどれほどの値打ちもなかった。本家ともなれば受け継がれてきた先祖の供養が大切な勤めであり、遠く故郷を離れた者ばかりの相続人たちにとっては積極的に関わりたくないのが本心だった。私にしても重荷ではあったが、幼い頃からのいきさつで伯母の思いは十分分かっていたし、他に適任者がいないのも事実なのだった。

線香で黒ずんだ、たくさんの先祖の位牌に手を合わせる。この部屋に入るといつも、懐かしいような哀しいような、複雑な気分になる。ミネさんは日夜、祖父母や伯母の思い出を手繰り寄せながら生きていた。

ひとりでもな〜んもさびしゅうはなな。話し相手はご仏壇にたくさんおらすと。

ミネさんは会う人ごとに繰り返していた。ミネさんがホームに入れば、仏壇を守る人はいなくなる。畳三畳分もある仏壇は私の家に置くのは到底無理だし、私の姓は鼎ではない。寺に納めてしまうのが良いと思っていた。

ミネさんがホームへ入所した後、掃除を済ませ仏壇に向き合おうと、急に動けなくなった。蟬の鳴き声のようなざわざわした声が周囲から押し寄せて思わず目を閉じた。今はまだ夏ではなかった。周りの空気が密度を増し、私の体は

に強い力で、イチ一人では手に負えないので孝彦を呼ぶ。注射されてようやく鎮まった。アレックスに掴まれた腕が痛む。

○月○日

発熱三日目。食欲が戻らない。投薬で昼間は大人しい。夜は睡眠薬。付き添うイチの目が暗い。

孝彦は敗血症だという。「以前から心配していました、あれほど不潔だったのだから、細菌が入っても当然です」と。今の医学では難しい、まして病院に連れては行けないのですから、対症療法をするしか手はありませんという。あの回復ぶりは嘘だったのか。「いえ、嘘ではありません、敗血症はしばらくしてから発症するものが多いのです、専門家でもだまされるくらいに」という。

落ち着いて考えてみればそんなに簡単にいくはずもないのに、どこかで楽観していた。朝鮮戦争当時、脱走兵は半島に送られて敵の最前線で名誉の戦死を遂げたらしい。それでなくても黒人部隊はいつも軍の先頭にいと聞く。その精鋭部隊の最前列に脱走兵のアレックスは押しやられるのだろうか。熊のように肉の盛り上がった屈強な男たちの前に、少年のような兵士が立ちはだかり、敵の標的になるのだろうか。

身震いする。二度と子供たちを戦争に送ってはならない。学校で生徒を前にする度に思う。アレックスも生徒の一人

柔らかく重いもので包まれた。身動きできないまま、長い時が経った。ようやく体が軽くなり、目を開けると蟬に似た声は消え、開け放った障子の向こうには花の終わった藤棚の緑が午後の日差しに揺れていた。

仏壇を寺に納めようという思いはすっかり消えていた。それから、仏壇を前にしてもあのような奇妙なことは二度と起こらない。血縁ではないが、ミネさんは伯母が一番信頼し伯母の最後を看取ってくれた人、家族同然の人なのだった。ミネさんの目の黒いうちは、このままにしておくのが良いだろう。台風で大風が吹いたり大雨になったりすると心配で、すぐに山向こうの自宅から車を飛ばして見回りに来るが、あちこち傷みながらも何とか持ちこたえている。ミネさんとこの家と、どちらの寿命が先なのだろうかとふと考えるときがある。

聞き取りはまだ半ばであり、ミネさんはまだ元気だが、先を急がねばと、私は気合を入れる。

順調だったアレックスの回復は、間もなく暗転する。

○月○日

アレックスが蔵で暴れた。母の着物を長持ちから引きずり出して、引き裂いた。母の使っていた化粧台や机も打ち割られた。布団も綿を引きずり出して使えなくした。余り

のようなものだ。

「アレックスに死んだ奥さんが乗り移ったとしよう。あの西の蔵は昔は流行病にかかった人を入れる座敷牢で、奥さんが病気になるてからは、ずうっと蔵の中で暮して死んでいきござった。それからあそこは、旦那さんが誰も入れて決めなざったと、あき子さんはそれば破ってしもうて」

ばちが当たったとよ。溜息のように言うと、ミネさんの目からジワリと涙が溢れた。伯母さんは、怪我した人を助けたんだから、米軍の脱走兵でも怖がらずに親切にしたらだから、さすが伯母さんじゃない。反発する思いをこらえきれずに、でも、と身を乗り出した私を遮るような勢いで、ミネさんは話し出した。

「あき子さんな、アレックスは離れに移しなざったと。蔵は空気が悪かし、母屋との行き来が不便かし、目も行き届かなくて言うて、イチさんともども離れに寝るように言いつけなざった。長年奉公している者でも、簡単には入れん部屋に、あの二人はまくらば並べて寝起きしたと。もう誰も使う人はおらん、空き部屋にしとくより良からうて。あき子さんは病気のアレックスに振り回されてしもうて」

ふっと口を閉じたミネさんは、思案するように目を遠くにやった。

「……なんであんなになったとやろう。結婚ばしなさらんかったとが、いかんだったやろうかねえ」

「伯母さんは、仕事が大好きで結婚しなかったと聞いたけど」

「あなたはこどもだったですけん。それはあき子さんの本心の半分。あき子さんは本家と結婚したようなもので、あき子さんの働きが本家の屋台骨を何とか支えていたとですよ。財産もなか見かけだけの家に養子に来る人がいますか？ あき子さんは、自分が本家に残ってあなたのお母さんやハワイの弟さんを自由になさった。ほんに、えらか人です。だれにもできることじゃなか」

男性介護士が部屋に顔を出す。そろそろ時間ですよと、目で合図する。ミネさんは私が訪れるとき以外は、ベッドで微睡んでいることが多くなったそうだ。

あなたの面会が相当負担のようです。くれぐれも無理のないようにお願いします。

ミネさんに会う前に、介護士は私に言った。

昔話をするのがそれほど負担になるのだろうかと思っただが、一応大人しく頷いておいた。百二歳なのだもの、どんなことがあってもおかしくはないだろう。けれど、まだ最後の、肝腎のことを確かめなければならなかった。自分勝手とは自覚しながらも、ミネさんの寿命がもう少しばかり終わりませんようにと願った。

てイチの罪ではない。私はイチに感謝こそすれ責める資格はない。このような形で命を落としたアレックスは哀れだが、すべての責任は私にある。イチは悪くない。

伯母の日記はここで突然終わる。

「騒ぎで目が覚めて、離れに行ったときには、もう、アレックスは廊下に転がって息がなかった。目の血走ったイチさんが肩で息をしてアレックスの傍に座りこんどって、あき子さんは乱れた髪を直してごさった。青い顔で震えて、帯がほどけて、何もいいなさらんで。でもなにかあったか、おおかた想像ができた。くしゃくしゃのアレックスの下ばかりから、長あか一物がだらりとたれとったけんねえ……」

ミネさんは、いやいやをするように首を左右に振った。「洞穴から出て来たもんは大切にするべしで、なんでご先祖様は遺しなごさったとやろうか。あき子さんには、むごかことじゃった」

足が震えている。どのようなことが話されてもしつかり聞いていようと決めていた。膝に置いた両手を握りしめ、気持ちを落ち着かせようと歯を食いしばった。

代々の鼎家の当主は、人ひとりが通れるほどの洞穴の入り口に戸を立て、前には小さな鳥居を立てて大切に守った。子供たちは近付くのを許されなかった。入り口は小さいが

○月○日

敗血症は治癒は難しいと孝彦は言う。上手くいくかと思えたが、甘い考えだった。最後まで見届けるしかない。アレックスがこのような日本の片田舎で生涯を終るとしたら哀れである。アメリカのどこに家族はいるのか、尋ねるが首を振るばかりだ。何か事情があるのだろう。思い出したくないほど辛いことがあったのか。哀れである。

○月○日

アレックス死ぬ。衰弱していたが病死ではない。アレックス自身の行為がこの結果を招いたが、その責任は私にある。アレックスを匿ったのは私だ。心を許し甘やかしたのも私だ。弱っていくアレックスを見かねて台所にあつた赤玉ポトワインを持ち出した。今にして思えば魔が差したとしか思えないが、何とか元氣を出してほしかった。アレックスの笑顔が見たかった。赤玉ポトワインの瓶を見たときの目の輝き。あの眼差しに誰が逆らえよう。ほんの気付けのつもりだったのだが、もつと欲しいとせがんだ。目に見えて生気が戻るのがうれしくて、つい言うことを聞いた。一緒に飲んでと言われて私も飲んだ。気付いた時には瓶が空になっていた。その後のことは書くのも疎ましい。イチは私を守ったのだ。だれよりもアレックスを見ていたのはイチなのだから。息子のように世話をしていた。断じ

奥へ進むと十名ほどが座れるくらいの広さがあり、戦国時代、敵から逃れ洞穴に隠れ住んだご先祖がこの地に定住し、それが鼎家の始まりだと、幼い頃から聞かされていた。

……洞穴にアレックスの遺体は埋められたのだろうか。

あの洞穴は人目に触れず遺体を埋めるには最適だろう。昔を知る人たちには特別に神聖な場所だった。簡単には入れない。

ようやく足の震えが止んだ。

「では、洞穴で見つかった骨は、その脱走兵なのね」

「そうでしょう。鼎の人以外、はいれん穴ですばい」

ミネさんは言い切った。

「ようやくと、話した」

ミネさんは黄色い前歯を見せて笑った。

「はなすならしおりちゃんしかおらんと、思うとった。いやかも知らんけど、これが真実」

ミネさんは、しんじつしんじつと呟きながら上体を起こした。

「ちよっと、ご不浄」

私も立ち上がり、ミネさんを支える。足元がふらつくが、何とか歩ける。ミネさんを支えているのか自分が支えられているのか、わからないままにトイレへ向かう。ミネさんがトイレに座り込むと自分もしたくなり、隣に座った。ミネさんの排尿の音は勢いがあり、長年の秘密を吐き出した

解放感に満ちているようだった。

帰り道、まだ落ち着かない思いを抱えてハンドルを握った。だからだら続く坂道を上り県境の有料トンネルを抜け、スピードを加減しながらループ橋をぐるぐると降りてしばらく走ると、我が家のある街に入る。海に開けた活気のある街だ。自宅のガレージに車を納め、私は無事に帰りついたと深く息を吐いた。

脱走兵のアレックスの死体は密かに葬られた。伯母とイチさんとミネさんと孝彦さんがそれを知っている。四人によつてアレックスの遺体は洞穴に運ばれ、埋められたのだ。五十数年後、猟犬に追われた猪が朽ちた板戸から洞穴に逃げ込み、土を掘り起こして白骨を露わにした。散り散りになったものもあるが、幸い頭骨は無事に残った。遺骨は無縁仏として、寺の共同の納骨堂に安置された。

伯母が書かなかつたことの顛末が分かつた。アレックスには気の毒ではあつたが、これで一件落着と思つた。

「まあだ、続きがある」

ありがとうとねぎらう私に、ミネさんは切り出した。目に生気が漲る。話は終つていない、話さなければあの世に行けないと、ミネさんの灰色の目が私に迫る。

白玉まんじゅうは少し胸につかえるようです。今は出来

上手く声が出ない。一番聞きたいことが、喉のあたりにつかえて苦しい。

「おばさんは、ハワイで子供を産んだの？」

ようやく言つた。声が掠れている。

ミネさんは遠くに目をやり、沈んだ声で答えた。

「はつきりせんとよねえ。帰つてきても何も言いなさらん。あたいも、よう聞きださんだつた。すぐに学校に復職しなさつて、前より元氣そうで、なんかあか抜けて、少し派手になつたらした。あき子さんには違いなかつてん、なんか違う人になつてござらした」

「百日の記」にはハワイに行つたことなど何も書いていない。アレックスの死でぶつりと終つている。東の蔵には代々使われてきた、たくさんの食器や書画骨董などが積み上げられ、人を頼んで遺品を整理していた最中に、漆の文箱に入った古いノートが見つかった。

伯母はアレックスが本家にいたおよそ百日の間だけ記録した。そして厭わしい出来事を遠ざけるように、ノートを隠した。

「伯母さんの日記があつたの、ミネさんは知ってる？」

「さあ、仕事が仕事じゃつたけん、いつも机で何かしよらしたもんねえ。あるかもしれんけど、あたいはみたことはなか。目も悪かけん、字もよう読めんと。あき子さんの言いつつて、亡くなる前に手紙も燃やしたけんねえ。ハワイ

るだけ消化の良いものばかりになつていきますからと、注意されていた。昔から好物だつた山の豆腐なら食べるだろうと持参したが、目もくれずに、ベッド脇のパイプ椅子に座らせる。

「あれからまもなく、あき子さんの食欲がのうなつて、食事中にえずくようになつて。疲れやろうから、寝とれば治るて、孝彦さんの医院にも行きなさらん。そのうち妊娠じゃないかと、思いはじめたとよ」

まさか。また膝が震えだす。これ以上、何を聞かされるのだろう。しかし、ありえないことではない。腰が抜けたようになつた。

「あき子さんな、一年の休暇願いを学校に届けなさつた。信之輔さんのいるハワイに行つて、養生するて。あたいは、その間本家を一人で守つてくれ、何も聞かんで言う通りにしてくれ、あとのことは孝彦さんに頼んでいるから困つたときには相談してくれればいからて、言われて。訳を聞かせてくれ、みずくさか、なして訳を言うてくれんとですかで泣いてすがつても、首を振るばかりじゃつた。子供のできたとでしよう？ て、聞いても、黙つて首ばふつて泣きよらす。あたいは、あき子さんの泣くとはたまらん。子供の頃からつよかおひとが泣くのは、とても見られんと。それで、仕方なしに一人で留守番することなつて。一年後には必ず帰つてくると、何度も指切りさせて」

の弟さんの手紙もあつたはずばつてん、言いつけどおりに全部燃やしたけん、なーんも残つたらん」

ふつと息を吐いたミネさんは、ちよつと間をおいて言つた。

「これでおしまい」

ミネさんの顔の皺がじわじわと広がつた。ゆつたりとした笑顔が私の方へ向いた。

「きのうも、あき子さんがはようおいでて、夢で言いよらした。いつまでそちらにいるつもりかて。たいがいにしなさいて、しおりちゃんに迷惑て」

「迷惑なんかじゃないよ。ここで一番長生きだつて、喜んでいたのでしよう。町長さんからお祝いが来たつて、嬉しそつたつたじゃない」

「付き合いですけん。ありがとうて言うたらんば、おさまらんでしょうが。あの五円禿の青洩垂れが町長てん、おかしか」

伯母の教え子で、あまり出来の良くなかつたという一人が、今はこの町の町長になつている。

昼食が運ばれてきた。私は保冷バッグから豆腐を出し、ベッドテーブルに置いた。お粥やお汁や、細かく刻まれた得体のしれないおかずには目もくれず、ミネさんは豆腐に向かい皺深い首を伸ばした。

ミネさんが伯母のことで嘘をつくはずはないと分かっているにしても、冷静に受け止めるのは難しかった。しばらく面会に行く気にはなれずにいたが、秋も深まる頃に台風がやってきて、風が収まるのを待つて本家の様子を車を見に走らせた。

しばらく手入れを怠っていた庭の樹木が幾本かなぎ倒されて、至る所に折れた枝が散乱していた。裏山の雑木林と間違えそうな荒れ果てた庭の姿だった。

涙が溢れた。これでは伯母に合わせる顔がない。

私は伯母の思いのどれほどをわかっていたのだろう。相続人だとすまし顔で本家にいても、伯母の何を知っていたのだろう。

後悔が大波のように押し寄せてきた。

重い秘密を抱えたまま生きた伯母の一生は、どれほど辛いものだっただろう。生前の伯母の優しい眼差しのあれこれを思い出しながら、涙にむせんだ。だれにも打ち明けず、背筋を伸ばして生き抜いた伯母の心情を思うと、切なさに胸が痛んだ。

年が明けて間もなく、ミネさんは死んだ。すこしずつ衰弱して、枯れ木のように痩せて生気がなくなっていく、最後は、すうつと細い息を吐くようにして終わった。

葬儀はミネさんの希望通り本家の仏間で行なった。僅か

行けなくなると恋しくなるよと、泣いていました」

「ほんとうに？」

「ええ。母や兄たちは、同じことばかり繰り返すので相手にしなかったのですが、ぼくは日本に興味があって、父の話をいつも聞いていました。耳にタコができるくらい」

ケントは歯並びのいい口元をほころばせた。白い歯がまぶしい。

「ぼくに、自分の代わりに日本へ行けと言いました。おまえは故郷へ帰れと、遺言のように言いました」

「だからここに来たのね。伯母さんの七回忌のときに。あのときにはみな、びっくりしていたわ。本家の親戚に外人さんがいるって。それまで知らなかった訳でもないでしょうに。叔父さんがあちらで黒人の人と結婚したことは、オープンでしたから」

「しおりさんは、すぐにいらつしやいと言ってくれて、助かりました。ぼくもドキドキだったから」

「だって知らせたのは私だもの。あなたが日本にいると聞いて、一応お知らせでもと思って。従兄弟がどんな人か、興味があったし。会ってすぐに分かったわ、親戚だって。

あなたには伯母さんの匂いがしましたから。私も伯母さんに似ていると言われているんですよ」

「では、ぼくたちは、似た者同士ですね」

ケントはまた白い歯を見せた。つられて私も笑った。ケ

の貯金が葬式代として残されていて、どこまでも始末のいいミネさんだった。私の家族と孝三さんや土地の親交のあった人十数人が集い、ミネさんを偲んだ。遺骨は本家の墓に納め、位牌は仏壇の頭子伯母の隣に並べた。

弟の俊一は仕事で渡米していたが、東京で大学教師をしている従兄弟は駆け付けてくれた。私は律儀なこの親族にこれまで以上の親しみを感じた。混血の外見は周りと同様に違っているが、長年日本で暮らしているの、その立ち居振る舞いには全く違和感がなく、終始控えめで従順な態度にみな好感を持っているようだった。

従兄弟の名前は、ケント・カナエ。日本名では鼎賢人。初対面の時にもらった名刺には両方が印刷されていた。葬儀後の振舞いの席で長い足を胡坐にして寛いでいるケントは、集まった人々がミネさんや伯母の思い出話をするのを穏やかに聞いていた。

温くなったお茶を淹れかえながら、私は言った。

「方言だから、わかりにくいでしょう？」

「ええ。でも、父がたまに話していたから、すこしわかります」

まあ。珍しいと思った。叔父は故郷が嫌いで、アメリカに渡ってから一度も帰ってきたことはない聞いていた。

「脳梗塞で倒れて体が不自由になってから、だんだん故郷の話をするようになりました。伯母さんにも会いたがって、

ントは少し真面目な顔になって、言った。

「ぼくは兄たちとはあまり似ていません。性格も違って、

歳も離れているし話が合わないし、いつも一人でした。母はとでもよくしてくれましたが、何となく兄たちとは違う顔を見せているような違和感があって、ずいぶんと悩みました。そんなこともあって、日本に来ようと思いましたが、ここにもっと早く来ていれば、伯母さんにも会えたのに、残念でした。あのころはぼくもいろいろ大変な時でしたから。……それで、ちょっとお話があります」

今朝、ケントが現れたときに感じた胸騒ぎを再び感じた。落ち着かなければいけない。大切なミネさんの葬式だもの、取り乱さないように、静かに送らなければいけない。

「この家に住んでみたいのですが」

え。言葉が出ないまま、ケントの顔を見た。

「真面目です。本当にここに住んでみたいと思っています。許してくださいませか」

「……お仕事はどうするんですか。東京でしょう」

「はい、そうですが、長年勤めていると、ごほうびに大学から一年間の自由がもらえます。好きな研究だけで、大学の仕事はしなくて良い。それが今度の春から始まるので、思い切ってここに住んでみたいと思いました。以前から考えていたことなんです。ぼくの専門は仏教史ですが、他の日本の歴史にも興味があって、何よりのテーマがぼくの先

祖にあると思いましたが」
「もう大したもののは残っていないと思いますけど。それに、住めるかどうか」

「ぼくの興味は物ではありません。歴史とか目に見えない思想や精神に興味があります。家は手入れをすれば、きつと大丈夫だと思います。まだ、十分使えます」

身を乗り出すようにケントは語る。きつと心惹かれるものがこの家にはあるのだろう。

伯母さんがハワイで産んだ子供はあなたです。あなたは伯母さんの子供です。

先ほどからずっと、この言葉が頭の中をぐるぐる回っている。

この人は鼎なのだ。私よりも直系なのだ。ここを継ぐべき人はこの人かもしれない。私の決断は早かった。私は言った。

「あなたが、この家を大事にしてくださいさるのなら、喜んでお願ひしましょうか。……ご仏壇を大切にしてくださいければ、有難いと思います」

家賃はどうしましょう。勢い込むようにケントは言ったが、とんでもないと答えた。一年という間だけでもこの家に住む人がいて、日々、仏壇に火を灯してくれば、何よりの供養になるだろう。
わざわざ葬式に駆け付けたのには驚いていたが、本当は

「ええ、自分で少しずつやります。だんだん暖かくなるし、ぼくは寒さに強いから」

ハワイ生まれなのにと思ったが、ケントは日本に何十年も住んでいるのだった。料理も他の家事も自分でやり、だから奥さんも一人暮らしの心配はしていないと言う。

「ぼくたちはヒフティ・ヒフティでやってきました。家事も育児も収入も。それで幸せなんです」

寄り添う奥さんは頷いて、ケントの右手に自分の手を重ねた。

ケントはまだ何も知らない。が、磁石に吸い寄せられるようにこの土地に住もうとしている。

あとからやって来た孝三さんの案内で近くの料理屋で食事をした後、私はケント夫妻とわかれて帰途についた。

車の助手席には、ケントに渡すはずだった「百日の記」が風呂敷に包まれたまま残っていた。

ケントにこそ読まれなければいけないノートだった。

ケントには自分のルーツを知る権利がある。伯母のことも知る権利がある。アレックスのことも知る権利がある。

その権利を奪うことはできない。

伯母は決してあなたのことをないがしろにしたわけではない。伯母が独身を貫いたのが何よりの証拠だ。伯母は自分の子供に愛情を注ぐように私を愛してくれた。これはき

これが目的だったのだろうと思った。ともあれ、もう終りと覚悟したこの家に再び住む人がいる。私は嬉しかった。ケントならば大丈夫かもしれないと思った。

本家の庭の梅が満開の頃、ケントは日本人の奥さん連れられてやって来た。同じ研究者の奥さんは別の大学で教師をしている。今は休暇で同行しているが、新学期が始まると東京の自宅へ帰るといふ。

私はせめてものもてなしと思い、人を頼んで水回りを直し仏間に続くいくつかの部屋を丁寧に掃除した。雑草や庭木が伸び放題だった庭は、ミネさんの葬儀の時に手入れしていた。

「なんと贅沢なお庭でしょう」

奥さんは溜息のような声をあげた。ケントは満足そうに目を細めて、微風に揺れる紅枝垂れ梅を見ている。風につて梅の香が漂う。座敷から見える築山や庭を蛇行する小川で、子供の頃は弟や孝三さんたちとよく遊んだ。

子供たちの乱暴な足に踏み荒らされてもびくともしなかった廊下は、いまは歩くたびにぎしぎしと不安な音を立て、あちこちの隙間から地面が覗いている。戸板も歪み、きちんと閉まらない。

「寒いでしょう。まず隙間風が入らないようにしなければいけませんね」

つと、あなたの代りだったに違いない。

全てを知った今ならわかる。

ケントに、ありつたけの伯母の話をしよう。どのような相談にもろう。ケントの力になろうと決心した。

今日は奥さんがいて、ノートを渡せなかった。ケントが一人になり、ここ暮らしに慣れて落ち着いたところに渡そう。必ずそうしようと思いつきながら、県境のトンネルを抜けた。

（『南風』40号より転載）



紺野夏子

こんの なつこ

1949生 佐賀県佐賀市出身
福岡市在住
九州大学医学部附属看護学校卒業
南風の会同人
福岡市文学賞受賞
2012 文芸思潮まほろば賞優秀作「マーサの足音」

南風

福岡県

唯一無二の世界を創り上げる

福岡市に拠点を置く同人誌「南風」は、平成四年に創刊された。職業作家であった、故中村光至氏を講師にいただくエッセイ教室の生徒が中心になり、二十人近くの同人が詩、エッセイ、小説を掲載した。年に一度の発行を着実に重ねていくなかで、書き続ける意思のある者たちに淘汰されていき、十号からは年に二度の発行に決まった。その頃から小説中心の同人誌としての体裁が整い始めた。

創刊時からの同人であり発行人でもあった松本文世は、その実力、人望において「南風」の中心的役割を担ってきた。福岡市文学賞受賞者でもある松本は、同賞や福岡市民文芸の選者も務め、福岡市の文芸の発展に寄与していたが、千葉へ居を移したために一線を退き、現編集発行人の和田信子が後を引き継いだ。

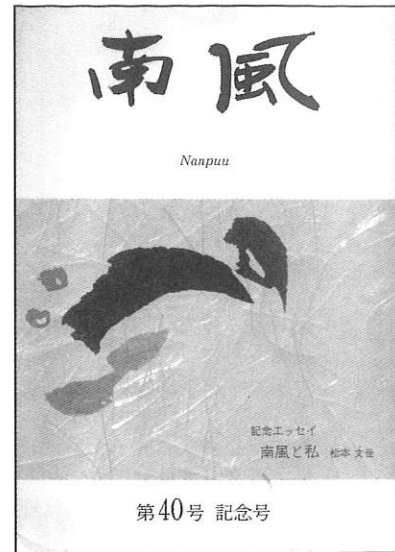
歳を重ねるにつれて少しずつ引退する同人がいて、この五年ほどは八人の女性同人ばかりでの作品の掲載が続いているが、決して女性に特化しているわけではなく、性別、職業を問わず、門戸は広く開放しているつもりである。ただ一つの条件は、作品の質である。

「南風」は次号掲載予定の原稿を持ち寄り、同人全員で批和の林美美子文学賞最終候補、また発行ごとに西日本新聞をはじめ新聞各紙に作品が紹介されるなど、「南風」誌の充実が他から認められているのも、自他ともに厳しい和田の姿勢によるところが大きい。

和田信子の作品「ミッドナイトコール」は、二〇一〇年の文芸思潮同人誌まほろば賞を受賞した。二〇一二年には紺野夏子の「マーサの足音」が同優秀作に選ばれ、その時にも「南風」の紹介をさせていた。今回は三度目である。「南風」は今四十二号を準備中である。福岡市には長い歴史を誇る同人誌が多くあり、まだまだ若い歴史ではあるが、それでも二十年を過ぎてよく続いてきたという思いは強い。インターネットが世の主流になり、何事も早く便利に一番で、同人誌活動は時代遅れだと言われているが、紙面を文字で埋め、唯一無二の世界を創り上げていく作業は、長年多くの人々が情熱を傾けた営みである。そのかけがえのない作品を発表する場としての同人誌活動も可能な限り続けていきたい。

この六月には、久しく待ち望んでいた新人が二人入会した。一人は五十代、一人は久々の男性で、他の同人誌での創作経験もある実力者である。二人の参加で例会はより活発な意見が飛び交うようになるだろう。新しい風が吹き、ともすれば停滞気味の創作活動の刺激になれば、なにより幸いである。

(南風の会事務局 紺野夏子)



評し合う。その例会では、みな平等で、納得できる意見もそうでない意見もまずは耳を傾ける。その上で、組上に乗った原稿を持ち帰り、再び推敲を重ね、ようやく最終原稿となる。この書き直しの過程こそがなにより力を伸ばす機会だと、同人はみな実感している。

原稿は、「南風」誌掲載仕様で提出する。以前は手書きだったものがワープロを使い始め、やがてパソコンのワードへと変わっていった。ほとんどの同人が「南風」で必要に迫られてパソコンを習得している。印刷所の担当者は提出された原稿を見て、その紙面の仕上がりに驚く。彼らにしてみれば祖父母の年齢に近い同人たちである。

創刊の頃からこのようなやり方があったわけではなく、現編集発行人の和田信子の熱意と努力によって確立されていった。和田、紺野、渡邊の福岡市文学賞受賞や紺野の九州芸術祭福岡市地区入賞、山口の北九州文学賞入賞、宮脇

南風



「南風」同人メンバー

南風

〒819・0014

福岡県福岡市早良区弥生二・二・八

二宮義子方

南風事務局

TEL092・846・0736

暗い森

山岳カメラマン

やっと、止まった時間が動く。
棺に蓋をする最後の瞬間、僕はその中に一枚の写真をそっと忍ばせた。

通夜、葬儀と一連の流れを終えて父は、茶毘にふされる。十二月末の寒い日、この辺りでも珍しく大雪の朝、山岳カメラマンとしての初仕事の日、父は山に入った。父とはそれが最後だった。あまりにも衝撃的なことで頭を整理するのに時間がかかった。遺ったのは父の愛用のカメラと一枚の写真。それには荒涼とした雪山の稜線に数十頭の鹿が写っていた。それは呪縛だ。ぼくはこの一枚の写真に刻まれている父の想いにずっと呪縛されていた。

身勝手な父だった。大手のS製薬会社の主任研究員だっ

僕はそれを機に大学を休学した。母は父と離婚して、NPO法人『野生動物救護センター』を運営している。僕は父や母と同じ、日大薬学部に入学したが、四年の冬に大学を休学した。それは熊谷冴子との出会いがそのきっかけでもある。

それから引きこもりで不登校だった妹——咲も、日方村から五・六キロ離れた祖父のいる『千栄』地区という集落に預けられている。この集落は現在五世帯九人で、新聞紙上では限界集落というレッテルを貼られている。そこで祖父——庸造は廃校になった小学校の教員住宅を自炊のできるゲストハウスに改造した。僕と咲はその祖父のゲストハウスの手伝っている。それでも、十一歳の咲は五、六キロの道のりを歩いて、毎日、日方村の複式の小学校に通うことになった。

季節はそろそろ冬を迎える。それは僕の空白の何かを埋めることができる季節だ。

ほんやり薄闇に包まれていると、溜息が漏れる。

僕は六歳から八歳までの二年間、祖父のいる日方村に住み、村外れにあった複式の小学校に通っていた。そこに五年生の熊谷冴子がいた。彼女は僕より五歳年上だった。

た父は二年前、その会社を突然辞めた。そして後継か、祖父のいる日高山脈の麓にある山小屋の住人となった。五十歳を機に、山岳カメラマンになるというのが、父の夢であったらしい。エリートコースの研究員の職を捨てた父に何があったのか、未だわからずじまいである。

祖父は日方村字千栄地区にある集落でゲストハウス「千栄の家」を営んでいる。国道274号線沿いにあるこのゲストハウスは、とくに夏から秋にかけてやってくるバックパッカーなどの旅人でにぎわっている。その利用料金は十年前から一泊五〇〇円であるせいも、口コミで訪れる人が大半だが、この十年間で八五九人が宿泊したと地方新聞に取りあげられている。今年の冬で十周年を迎えるという。

子どもの頃の僕はいつも首を垂れて、ただ石ころを見つけていた。ある日、石にしては妙に白すぎるものを見つけた。それは骨の破片であった。手に取ってじっと見つめていると、それにはなにやら柔らかな生気が籠っているような気がした。

僕はときどき森の草むらで鹿の角と肢の骨を見つけた。その鹿は野犬の餌じきにでもなったのか。僕は不快な気分を抑えて、見つけた骨を自分の考え出した儀式にのっとって埋葬した。僕は空缶の中にその骨片を押し込み、土を掘って新しい墓を作った。

そして僕は小さな土盛りを作り、その斜面を指先で叩いたりして、その上に小石と野の花を飾った。僕はそのときの指先についた土の感触をまだ覚えている。いや、未だその白い骨の一つ一つの感触も覚えている。その時、傍にいた冴子は墓標だといって鹿の角を土中深く突き立てた。

当時の彼女の言葉など覚えてはいるはずもないのに、なぜか冴子の輪郭がなつかしい。今頃になって、父の遺品となった一枚の写真の裏に書かれてあった言葉が、何度も頭の中を駆け巡る。それには『自然の中で生きる』とある。

冴子の言葉を探しあぐねていた僕は、写真の裏に書かれてあった言葉と、あの時彼女が発した言葉と同じだったことに気づいた。僕は肩を震わせ頭を抱えた。

読み返すたびに、父の想いが僕の脳裏に浮かぶ。だがそ

の想いは滑稽すぎる。

なにしろ冴子とは五年ぶりの再会になりそうだ。彼女と出会うのは、彼女が出会うべき人だと認識している僕自身の記憶そのものなのだが、なんとも所在ないのだ。

農場を越え、牧草畑を縁取りするようにカラマツ林が並んでいるのが見える。

その麓の斜面を登り、しばらく行くと、森の入口の銀杏の巨木が大きな影を落としていた。その狭い道をあえぎあえぎ登っていくと森の平地に出る。

記憶の中の雑木林とは違っていた。どこかの森へ間違っ入ってきたのか。久しぶりに僕は森の道を歩いた。後ろを振り向くと、その白昼の森に冴子がいるような気がする。草地からひんやりとした森の樹々の蔭に入ると、樹液の匂いが霧のように湧いてくる。僕は深呼吸をして、その匂いを受け入れる。枯れ葉のかさつく音がした。枯葉を覆う霜柱がわれて、飛び散る。枯葉が湿っぽい匂いを発して舞い落ちた。いつかはこの森の向こうへ抜けてみたいと思った。日方川は昔と少しも変わりがなかった。

今日は空が低い。晩秋、厚い雲の重圧でのしかかってくるようだった。祖父の家の裏庭には川が流れている。

僕は毎日、咲とその川を眺めている。僕らは天候が悪くなってきたので川辺を出ようとしたとき、この集落の「鹿

いると、僕は見知らぬ風景に溶け込んでゆくようで本物の迷子になりそうだった。

半年前、僕、芝村庸一は、大学を休学して、咲を連れて再び祖父のところへやって来た。そこで僕は『野生動物救護センター』に務めている熊谷冴子と再会した。彼女はそこで取材を兼ねた母の助手のようなことをしているらしい。

今の熊谷冴子の生業はフリーのルポライターである。昨年の春までS製薬会社に約二年間勤務した経験を持つという。彼女が辞める半年ほど前に書いた「現代医薬事情の裏側」というレポート記事が好評で、その反響により週刊誌などで連載が続いている。その反面、S製薬会社からの圧力が相当あるらしかった。

熊谷冴子は日大学の薬学部を卒業して、S製薬に入社したのは二年前であった。彼女は札幌支社の敷地内にある附属中央研究所の女子研究員としては、ほとんど目立たない存在といってたかった。彼女は入社と同時に、父の部下として配属された。彼女は父と同じ大学の大学院修士課程出身で、同じ研究室の後輩であることから、縁故採用と陰口を叩かれていた。

父は医薬候補の化合物の動物実験のうち、臨床検査の部

討ち名人」と言われる老人に呼び止められる。「——もうすぐ雨がやってくる。この川は雨が降るときが一番山女が釣れるぞ——」

僕は引き返して今度は一時間ほど庭を見続けた。ただ、祖父の庭はかつてのときより荒れている。幹の太い樹や鮮やかな野草が生い茂る庭だった。その庭を耳をぴんと立てた尾の長い大きなハスキー犬が歩いている。まるで森の中にいるようで、いつまで見ても飽きなかった。遠くに日高山脈を眺めることができた。みぞれ混じりの雨は、日高山脈の方からやってきた。それまでくつきりと緑の姿を見せていた山肌が、次第に白く曇り出し、やがて紫色に変わる。山の全景がその色に埋まって、全く見えなくなる。

裏庭にある樹齢二百年という瘤だらけで、妖怪のような大木の根っこには大きな穴がある。その穴が子供の頃の、僕の適当な隠れ場所であった。その暗い湿った場所が、僕にとっては癒され、一番落ち着くところだった。子供の頃の僕はそういうところに隠れて、なにをするわけでもなく、ただひたすらぼんやりと青空を眺めて過ごしていた。人目につかない場所に隠れてやり過ごす感覚は、学校を早退して、世の中の時間の外へ出たようなあの感覚に近いのかもしれない。その時は誰も僕を探しにやって来なかったし、誰ひとりとしてこの広い庭を通るものもいなかった。それは時間だけがゆっくりと過ぎてゆき、そのままじつとして

門を担当していた。入社当初の彼女は、主にマウスやモルモットなどを飼育し、その化合物をそれらの動物たちの餌に混ぜて投与したときのさまざまな影響を観察するのである。そこは、実験動物の体重の変化や異常行動の有無、そして血液や尿成分の変化などを測定する部署で、父の下には彼女の他に数名の若手研究員がいた。

僕は大学四年の時に、熊谷冴子のその論文を読み、感銘を受け、それがこの大学を休学するきっかけとなったのである。それだけに医薬という化学物質の目に余る濫用という理不尽さに我慢がならず、それらにメスを入れる側に回った彼女に、是非会いたかった。僕は少し感傷的になっていた。

秋の終りのある夕方、僕は五年振りに熊谷冴子と札幌駅前前の喫茶店で待ち合わせることにした。

彼女の方が先に来ていて、窓辺の席に腰をおろしていた。広場に面した建物の二階にある店で、僕の注文したコーヒーが運ばれてきたとき、彼女はいきなり切り出した。

「庸一くんが、芝村健蔵主任の息子さんとは知らなかったわ。あたし、この春、S製薬の研究所を辞めたのよ」

「辞めたんですか」

「ええ、向かなかったんですね、この仕事が……」

冷静に話す彼女は僕をなつかしがらなかつた。むしろ昔より冷たくなぜか、客観的だった。だが僕には彼女の話し

たいことが大方予想がついたような気がする。

「それはどんなところが……」

「ほとんど全部かな……。現実あまりにも違い過ぎたのよね。それは学生気分が抜けないからだと言われたけど、あたしの本質に関わる問題だから、簡単に妥協できなかったのよね」

僕の質問に彼女は理性的の勝った語り口で話しはじめた。

「——それでもあたし、製薬会社が実験室で合成した化合物をどのようにして医薬品として開発してゆくか、理解していたつもりだった。勿論、マウスやモルモット、それから兎や犬といった動物たちを使って行う実験も知っていたし、学生時代にも研究室で実習もやったわ。だけれども、企業の現実には教室で学んだことをはるかに上回るすさまじいものだった。S製薬一つの研究所で一年間に使用する実験動物だけでも、マウスが一万匹、ラットが一万匹、兎が二百匹。ほかにもモルモットやハムスター、そして猫や犬なども数百匹使っている。毎年、毎年、こんなに多くの動物たちを医薬品の開発のためとって使い捨てにしているのよ」

「……そうですか……」

僕は語り終えてから大きく肩で息をしている彼女の目のぞいた。彼女も僕を見つめ返しながら、再び喋りはじめた。

「——向き不向きということなら仕方がないけれど、あたし一人が会社を辞めてもS製薬やもつと他の製薬会社では、

の。たとえば、たくさんのデータを取るために動物を使った薬品が必ずしも人間に効くとは限らないし、臨床実験に役立っているというのが、もし動物実験に興味があるとしても、なにしろ実験に供する動物の数が多過ぎるのよ。だから、動物の脳や臓器を傷つけて病気を作り出したり、あるいは、遺伝子操作で生まれながらに腎臓病とか糖尿病などの病態をつくり出したりしているの、おかしいと思うの。それで薬で活かそうとする。治療効果があったように見えるものだけを選び抜き、さらに研究を推し進める。いいえ、ここに至るまでに殺されていく動物たちのなんと多いことか……医学が人類の未来に貢献しているといくら言われても、あたしなんか、そんなことお為ごかしもいいところって思ったら、そのやり方にあたり耐えられなくなつて……」

彼女の涙を浮かべながらの熱弁に、僕は言葉も出なかつた。間違つてはいない。彼女の言うとおりのことだ。彼女の感受性が鈍らずに、いつまでも研ぎ澄まされたままだから、彼女は苦しいのだ。その時彼女のことを、企業の論理に自分の感受性を馴らすことができない人だと、僕は思った。

僕が札幌に帰ってから、半年ばかりというものは、いま思い出しでも瞬く間に過ぎてしまつて、僕自身、自分の進むべき道というものがよく見えなくなつていた。僕は牙子

これまでと少しも変わらずに動物たちを新薬のためとって、使い捨てするでしょうね。がちりと組み込まれた企業論理の中では、動物たちを救うことはむづかしいと思いますよ。でもね、とりあえず、あたし自身が動物たちを苦しめ、最後は残らず切り刻み、殺してしまふということを止めることから、始めなければと思うんですね」

やあつて僕は再び尋ねた。

「余計なことを尋ねるようですが、辞めてからどうするんですか」

「まだはつきりと決めてはいませんが、動物救護のためのナチュラリストとしてルポライターを続けていきたいです。とりあえず、取材を兼ねて、札幌にある『動物救護センター』の手伝いをする事になつて……甘いと言われるのを承知で、あたし、まず、野生動物を救うことから、始めたいのよ……」

この人は自分の感受性をごまかせずに生きているのだな、と僕は思った。そう思いながら、僕は、短かめの髪、口紅を引いただけの素顔に近い彼女をじつと見つめる。すると、僕は何かを喋ろうとする彼女に、少年っぽい表情とどこもなく硬い身体の線に、一途で純真なものを感じていた。

なぜか彼女は堰を切つたように喋りつづける。

「——あたしが、こんなこといえば甘ちゃん、科学的ではないと言われるかもしれないけど、あえて言いたかつた」と話した時間が経つにつれて、そのおびただしい数の殺された動物たちの死について考えるようになっていた。それは彼女が医薬開発のために使われた実験動物たちのか弱い声に、耳を傾けていると聞いたからである。彼女のその声を聞くという感受性に共感したからである。それに彼女の言葉の波に揺られ、あの声を思い出すと、彼女の胸元にぶら下がっていた「青いラズライト」の石に、なぜか僕は安らぎと切なさを交錯させていた。その時から僕は先輩でもある彼女を、ひとりの女として気になり始めていた。

夜毎、僕の中で彼女の言葉が甦える。そして僕は彼女と雪山で、鹿たちのいる風景を見たいと夢見ていた。

僕が大学を休学したもうひとつのきっかけになつたのは、四年時の実習授業で、数日後に解剖される一群のマウスの入ったステンレス製の飼育籠の前を通りかかったときのことだつた。何か呼ぶ声が、聞えたような気がした。僕は足を止め、あたりを見回す。人影はどこにもない。初めは僕が疲れているから空耳かと思つて、その場を通り過ぎようとした時だ。「ここだ」とさらに声がした。声の方に顔を向けると、数十匹のマウスの中の一匹と目が合った。その赤い目が、僕に何かを訴えかけているような気がした。ただそれだけのことだつた。幻聴だとも思ったが、なぜか僕はこのまま研究室で勉強し、父のように製薬会社で動物実験に明けくれることに、なぜか罪悪感を感じるようになって

ていた。

その年の冬に、僕は札幌の実家から、祖父のいる道東の日方村に行くことにした。五年前、母と離婚した父の元に残った僕と妹は、なぜか日方村にいる祖父の所に行こうと秘かに話し合っていた。そして僕たちはいつか二人で鹿の見える森へ行こうと決めていた。

「おお、お兄ちゃん、……サ、サ、サキ、お兄ちゃんと、いい、いっしょに、いく……」
「そうか、行くか。おじいちゃんのところは、寒いけど、雪がたくさんあって、いいところだよ」

父が突然いなくなり、祖父のところに行く前の夜、僕は期待と不安で、一晩中、寝れなかった。だが、咲は僕のベッドの隣で赤ん坊のように熟睡している。

僕はベッドから起きあがると、台所に行き、冷蔵庫から缶ビールを取り出し、いっしょに飲み干し、冴子のことを思い出していた。それから、台所の棚に置いてある携帯用のラジオをつける。食事のとき、FM放送で音楽を聴くために父が置いたものである。

なぜか僕は冴子のことを思うと、にわかにも目の前が空っぽになる。先程まで、これからは妹、咲のために生活しようという充たされたはずの時間が、なし崩しに失われていく予感がする。咲のアトピーの症状は、徐々にではあるが明らかに進行している。それに伴って咲の吃音はひどくな

り、外ではほとんど無口になっていた。いつもの習慣だが、僕は咲の目を見ながら言葉をかける。すると咲はふっとその目をそらす。その時僕は自分の思いとうらはらに、咲のことがもどかしい程遠い存在に思われた。

牧場の駐車場に四駆の車を止めた。僕も冴子もオーバーズボンをつけ、水色のアノラックの下には厚いセーターを着込んだ。ザック、かんじき、ピッケル、コップ、コンロ、そして寝袋も車のトランクの隅に積み上げてある。その時僕は父の遺品のカメラを忘れてはいなかった。メイン機は最新の一眼レフの「ニコンD3」で、サブ機に「ニコンD300」の一眼レフを持った。レンズは標準ズームレンズと望遠ズームの「シグマAPO 150-500mm」を持った。他に方位磁石やフィルターなどを、それらと共にカメラリュック「600AWII」に入れた。村道から山道に降りようとする僕らに祖父、庸造はザックの蓋を閉じながら言う。

「輪かんじきをはいていったほうがいい。今年はいつもよらずと雪が多いからね」

自然の力はあきれれる程充実し、刻一刻と訪れる変化が目を楽しませてくれる。相変わらず雪は流れたり、止んだり、光と影と雲を運んできた。風がないのが何よりも幸いであ

る。僕の幼いときの記憶を頼りの歩行は、実際やってみると心細かった。柔らかな雪が積った吹きだまりに輪かんじきごと足をとられ、僕は二度ばかり転倒した。転倒しながら上げた悲鳴を、冴子に聞かれた。彼女も大笑いしながら転倒している。

僕らは傾斜のついたカラマツの疎林に入った。

今、樹林は仮死状態になっている。斜面の方から雪が崩れてくる。崩れた雪は斜面に吸い込まれて跡形もなくなる。僕が立ち止まっていると、冴子の吐く息が白い。僕は肌がうっすらと汗に濡れてきたことを感じた。空に向かって突き立った梢と梢との間に、透明なものが揺れているのを感じる。形を失って自在になったものが、思いどおりに動いている。それは山に何度も足を運んでいるうちに感じるようになった。

なおも歩を進めていった僕の頭上に、梢の上から、顔をのぞかせるような形で白い峰が現れた。

鹿の足跡が木立の間に点々と伸びている。兎の足跡もあった。兎は雪下の笹の間にトンネルを掘って通路としていた。晴れた暖かい日には、暗い通路から好奇心を隠そうともせずに出てくる。今年は何年になく雪が多かった。笹を冬の間の食糧にする鹿は、これでは飢える。

靴の下の雪がぎしぎしと鳴った。乾いた粉のような雪である。この雪の下から笹や木の皮を掘りだして食べなければ

ばならないとしたら、こんな恐ろしいことはない。これこそ鹿たちにとっては、命を削ることなのだ。

不意に前方に濃密な気配を感じる。枯れた笹や枝を鳴らして、気配は素早く遠ざかっていく。何が起こったのか、僕はその場に立ちすくんだ。

「野犬だ。五、六頭はいる」

双眼鏡をのぞいたまま祖父が大声を出した。その声を聞いたからだだったが、逃げていく犬たちがもの悲しい。祖父は七十を幾つか過ぎていたが、精悍であった。身長は一六〇くらいしかないのだが、体重は八十キロくらいであった。この山で生きてきた男なのである。褐色の肌に筋肉質の体躯は、さすが森林伐採の仕事をしていただけのこととはある。

立ち止まったついでに、祖父がコンパスを見詰めていた。何度も足を踏み入れている山であったが、時として方向がわからなくなるらしい。祖父は腰からぶら下げているビニール袋の中の地図と、コンパスの針が示す角度とを照合していた。それから腕を振って僕と冴子に歩く方向を指図した。僕の頭上に顔をのぞかせるような形で、白い峰が現れる。

陽を浴びた峰は特別にその美しさを感じ、僕は立ち止まって仰ぎ見る。その時、冴子は突然、走り出した。

「ちよつときてくださーい」

彼女の叫び声が出た。それは動揺したもので、僕は反射的に駆け出していった。雪に慣れていた僕は、よく身体が動くようになっていた。だが、上体ばかりが先へ先へと急ぐので、木から木へとつかまつて行く。枝に積っていた雪が時々頭上から降ってくる。

幹の間に立っている彼女の恐怖に満ちた顔が見えた。黒い瞳が大きく、鹿に似ているその顔に向かって、僕は全力で疾走していく。背中がザックが暴れ騒いだ。凍りついた彼女の顔が粉々に砕けてしまいうような気がした。

「うわあ、ひでえや」

「野犬にやられたんだよね」

「その前に密猟者が殺ったんだ」

後から現場に着いた祖父の口から声が洩れた。僕は足を踏みこらえて、駆けてきた勢いを殺し、肩で息をついた。喉を通って出たり入ったりする自分の息の音が聞える。

「ひでえや」

知らず知らずのうちに、僕は喉の奥から妙にしわがれた声を洩らしている。ほとんど呻き声である。それからあらためて、僕はその死骸を正視した。

細い角が生えている三、四歳の雌鹿だ。顎の下から首を折り曲げるようにしている。濡れた黒い瞳は見開かれているのだが、それは何も見ていなかった。腹はばかりとできた空洞である。内臓が残らず凍りつき、全身が銀色の水の

粉に覆われ、臭いもない。

誰も口を開こうとはしない。風は降り積った雪を巻き上げ、鹿の身体に銀色の粉をかけた。

梢の上の空は雲ひとつない澄んだ青だ。その空の青さとは釣り合わない、彼女の悲鳴にも似た声が沢に渦巻き、騒然とした風のようになる。

「じっちゃん、どうするの？」

僕に声を掛けられた祖父は、しばらく返事をしない。風の音が再び僕の耳の奥に籠る。

「このまま放つてはおけない。運んでいって埋めてやろう」祖父の声に僕は頷いた。祖父がかついだままの僕のザックから、ワイヤーカッターを取り出し、鹿の首に巻きつけている針金を切った。

鹿は不自然に浮き上がっていた頭を倒したが、その分尻を浮かせた。しかし、その表情にはなんの変化もない。すっかり凍りついている様子だ。牙子はさつきから口を押えたまま、同じところに立っている。手を離せば悲鳴が洩れてしまいかもしれない。

その彼女が僕のほうにじつとそそいでいた視線に、僕は自分でも強いものを感じ、それが僕を弾かせて樹々のほうへ向かわせた。その時僕はもうひとつの視線に出会ったのだ。それは僕が見返せば、その場で砕けてしまいうような弱々しい視線である。

その視線に吸い寄せられるようにして、僕は歩を進めていく。樹の根元にあるものしか、視線はいかなくなかった。

子鹿が脚を折り畳んでしゃがみ込み、小刻みに震えていたのだ。立とうとする気力はあるらしいのだが、折れ曲がった膝に力が入らず、それがまた震えになっていくようである。近づいていった僕は子鹿を見ようとはしなかった。

「子鹿はまだ生きています」

足元にいる子鹿を見下ろして、僕は言う。その声に祖父と牙子が見つからなかったな。お前は運の強い子だ

「よく野犬に見つからなかったな。お前は運の強い子だ」祖父の口からひとり声で声が洩れ出ていく。子鹿はひどく痩せていた。鼻梁はナイフのように薄く尖り、頭蓋骨の形がわかるほどだった。薄茶色の毛の先には雪の粉が結晶のようになっつついている。

「このままでは死んじゃうわ」

いつの間にか傍に立っていた牙子が、先程とは打って変わった穏やかな声を出した。そして僕の言葉も、流れるように口から洩れたのだった。

「連れていこう」

「どこに？」

「生きられるところにさ」

「野生のものが生きられるかな」

「でも、このまま見捨ててはおけないよ」

そういつて僕は祖父から受け取った毛布をひろげるや、

子鹿の上に掛けた。子鹿は震えを毛布にそのまま伝えた。

毛布の小刻みな動きは、子鹿の恐怖そのものかもしれない。

「庸一が見つけたんだから、おまえが持っていきなさい。わしは母鹿のほうを担いでいく」

祖父の声に促されて、僕は毛布を上から両腕で抱えた。

思ったよりも子鹿は軽く、腕に込めた力が余った。強く抱きしめすぎる力を緩めようとする。だが、うまく力を抜くことができない。毛布の内側の子鹿は壊れもののようにだった。

子鹿の恐怖がそのまま僕の腕に伝わってくる。

「庸一くん、重いのか？」

牙子が途中まで両腕を伸ばしてくる。だがその手には、子鹿を抱き取ろうとする意志までは伝わってこなかった。

「抱いてみるかい」

よろめくような感じで僕は言ってみた。確かに腕の中で、子鹿は震えているのだが、どう持ったらよいかわからない。

「いい………恐いから………」

牙子の声を聞きながら、何が恐いのか僕にはわからなかった。それは子鹿が恐いともとれるし、子鹿を傷つけるのが恐いともとれる。

「とにかく、冷たいんだ。こんなに冷たくてよく生きていられると思う。死ぬ一歩手前だったのかもしれない」

僕は彼女を見て、少しだが微笑む余裕もできている。僕の腕の中には子鹿のおののきがある。ついに彼女が手を伸ばしてきて毛布の上から子鹿に触れた。すぐにその手をどけるかと思つたが、彼女はそのまましばらく子鹿に手をかけていた。

「びくびくしている」

彼女は毛布に耳を押しつけるような具合で言う。

「震えが止まらないんだ。助からないかもしれない」

「ね、助けて！ どうしても助けましょう」

哀願するような口調で彼女は言う。多分駄目だろうというあきらめが僕にはあつた。子鹿は母親が生きたまま野犬に食われるのを見たかも知れないし、それに衰弱しすぎてもいる。

「やってみるけど、絶対助かるとはいえないよ」

「どうしてこんなひどい目に合わなければならぬの。悪いこともしていないのに、ただ静かにこの森で暮らしていただけなのに……」

彼女は目に涙をためていた。その涙も凍りつきそうである。

祖父は鉋を振るって木の枝を刈り、即製の櫂こしをこしらえていた。刈り倒した枝の切り口が白い。祖父は殺された母鹿をザイルで枝に縛りつけた。枝は平行に二本が渡してあり、鹿を積んだりヤカーのようになった。

「生きるよ。俺とじつちゃんどが世話をするから」

冴子との間で、言葉が滑らかに転がる。それが僕には気持ちよかつた。

子鹿は小さな牧場を経営している祖父の家畜小屋で、飼うことになった。その子鹿は干草や穀物などの家畜の餌を与えても、食べようとしめない。だから、乳離れはどうにしていたが、人間の赤ん坊用の哺乳瓶を買ってきて、牛乳を飲ませるしかなかつた。

今の僕には、この子鹿が助かるという確信めいたものがあつた。根拠は、と問われれば応えようもない。だが、あえていえば、たくさん死んでいるのなら一頭くらいは助かるのが自然の摂理だと。そういうものだと思は信じたかつたからだ。

密猟の罠にかかつて死んだ母鹿を、祖父の裏庭まで運び、崖に穴を掘って埋めた。雪が降り積もっていないところを掘りはじめてしまったので、崖の地面は固く凍っていた。スコップの先を跳ね返されながら、凍った土を掘り抜いていく。すると、その下から軟らかな赤土の層がでてきた。

そこは森を駆け回っていた母鹿が、永遠に眠りにつく暖かな寝床だ。

この暗闇で眠りつづける母鹿のことは、これから先、僕は何度も思い出すに違いない。

その雌鹿は倒れた時の姿をまったく変えようとしていない。

生きた子鹿を抱いたまま、僕は先頭の祖父の速度に合わせて歩き出した。来る時と違って大きな荷物ができていたのだが、斜面を下るには自分の体重も加勢してくれるのが楽であつた。冴子は僕たちが歩いていく足跡をたどって、少し後からついて来た。子鹿の「ぶるっ」という震えが毛布越しに伝わり、僕は先方の木立の方に向いていた視線を元に戻した。

林道の途中の、道路端に止めておいた四輪駆動車に乗り、僕たちは祖父の家に着いた。その時、子鹿は目蓋も上げていられないほど弱つていた。その子鹿は時折、小刻みに全身を震わせるばかりである。段ボール箱に毛布を敷き、僕はその子鹿を箱に降ろし、毛布で包み込んだ。だが、僕にはその子鹿を暖めたほうがよいのか、常温でよいのかわからなかつた。

「子鹿がまだ腕の中にあるような気がするよ。あの重みは一生忘れないかもしれない」

僕は隣にいる冴子の顔を、一瞬見てからすぐに視線をそらした。彼女の顔からは、先程の子鹿へのおののきがずいぶん薄らいでいる。

「生きられるかしら。こんなにも可憐なの見たことない。どうしても生きてほしい」

二ヶ月前、僕は十一歳になる妹、咲を連れて、祖父のところに来た。越してきた翌日から、僕は咲は近隣の農家に挨拶まわりをすませると、すぐに家畜小屋の世話を始めた。そしてその世話が終ると、ゲストハウス「千菜」の手伝いに行く。近隣の農家といっても五、六キロは離れていた。

僕と咲はお互いに仲の良い兄妹であり、信頼のおける友達であり、しかも僕にとつてはよく嫉けられたペットであり、興味のつきないおもちちゃだった。その輝かしい兄と妹の時代に翳りがさすようになったのは、妹が風呂を別々に入ると宣言した頃だつたと思う。

それは突然だつた。咲が小学五年生になったときだ。僕は理由を聞いたが、納得のいく答えは返ってこなかつた。咲はめまぐるしく変わっていった。髪型が変わり、着るものが変わり、匂いが変わり、身体つきが変わっていった。微かな脂肪の匂いのする丸く柔らかなものに変わっていく妹に、僕は戸惑うばかりだつた。

日曜日の早朝に母の家を出る。第三土曜日は、月一度の母との面会日なのだ。地下鉄で札幌駅まで行き、日高行き普通列車に乗る。

空は曇っている。重そうな雲が街に向かって落ちかかっている。列車の軌道が高架橋にあるせいか、平坦な街は遠くまで見渡せた。もちろん視線はビルによって遮られてい

る。そのビルの隙間からまた遠い街が見える。しばらくすると、何もささぎられるものない雑木林と川にぶつかる。その水の流れを遡っていけば、山奥の岩の間に湧く、一滴にたどり着くのである。日方川の源流は、今僕が向かっている日高山脈からの一滴なのだ。僕は心の内に、その一滴の水に帰りたいという欲求があることを、ぼんやりと感じていた。

列車はまるで時の流れの中を走っている。窓の外の景色が変わっていく。何本かの川を渡った。切れ目なく並んでいた家の間に、冬枯れの畑がある。くすんだ緑色のカラマツ林や銀色の白樺の幹が、後方に飛び去っていく。雲はますます低くなってくる。今にも雪が降り出すのかもしれない。大地がすべてを覆いつくしてしまう雪を呼んでいるのだ。

牧草畑がある地平線の近くはカラマツの平地林であるが、畑や林の間にある家は、心細そうに固まり合っている。

整然と耕されたこのあたりも、かつては、鬱蒼と繁る森だったに違いない。そしてその森には鹿がぶつかり合う程多敷棲んでいて、自在に跳ねまわっていたはずだ。窓ガラス越しではあるが、雪に覆われた大地を凝視していると、深々とした未開の森林が甦ってくるような気がしてくる。農場のある祖父の家まで、日方村唯一の村営のマイクロバスに乗った。空にはまだ明るみが残っていたが、林の中

んだんですよ。もちろん、最初は恐がっていましたけどね……」

冴子は子鹿の喉の下に手を当てると、プラスチックの哺乳瓶をアノラックのポケットから取り出した。村の農協直売所に行つて粉ミルクと一緒に買ったのだという。白い光を集める哺乳瓶を、彼女が子鹿の口に持つていく。すると子鹿は黒っぽい舌を出し、うまそうにゴムの乳首を吸い、喉を波打させた。子鹿の顔を見て、僕はあのときの、雪山での彼女を思い出していた。

「このまま育てば、来年の夏には森に返せそうだな」

祖父が言うと、冴子の言葉がそれに追いつく。

「でも、子鹿は母親とは二年くらい一緒にいるというじゃないですか。群の中ではもつといるのかな。もうちょっと育てないと野犬にやられちゃいますよ」

「じゃあ冴子さん、この子鹿と一緒にずっとここで暮らせばいいじゃないですか」

「そんなことできるわけないでしょ。野生に返さないとね」僕は彼女の声を久しぶりに聞いて、心がはずむようであった。が、冴子は僕を無視するように、子鹿に乳を与えつづけている。子鹿の脚は、削った棒のように、細く華奢だった。今にも折れ曲がりそうな脚が、瘦せた胴を支えている。あの雪山で、こんなにも心細い命がなごらえることができたのは、奇跡のように思えた。

の道は暗い。先に走ったタイヤ跡をたどっていくマイクロバスは、盛り上がった雪に車体の底をぶつつけていた。

鹿の影が走らないかと、僕は後部座席に座ったまま視線をこらす。咲は疲れ果てすっかり眠っていた。僕は知らずのうちに、野生の感覚を取り戻していくような自分がうれしかった。

「やっとな来たか、よかったな」

マイクロバスが止まり、僕が料金を払っている時に、祖父の声が聞えた。以前と同じ青のアノラックを着た祖父は、納屋の金網に向かって歩いていく。金網の中で黒い影が動いたような気がする。僕は雪かきがしてある湿った黒い土を踏んで、納屋に近づいていった。

「じっちゃん、またお世話になるよ」

まだ距離があるうちに、僕と咲は祖父に向かって頭を下げた。濡れた泥が靴底に貼りつき、登山靴が重くなる。

「庸一がこなかったら、このサキが淋しがらぞ」

「えっ？ サキって？」

笑顔をつくって金網の中をぞいた僕は、その中にいた冴子と目を合わせた。冴子も先週と同じ色のアノラックを着ていた。彼女も現実の時の激しい流れを逃れて、再びここにやって来たのだと、今さらのように思った。

「本当はね、絶対に駄目だと思ったんだけど、庸造さんに教えられて、牛乳は飲まなかったけれど、ヤギの乳は飲

「冴子さんも、それを飲ませたら中に入れよ。咲がここで住む歓迎会をやるんだからな。それとも今夜はそこで寝るかの」

すでに背中を向けながら、祖父は言った。彼女の方からは返事がない。僕は金網の中に気持ちを残しながら、祖父に従ってロッヂに入っていく。

ぶ厚い木造りの扉を閉めると、風の音は止み、湿った熱が顔の表面にとどいた。薪ストーブのまわりを、祖母の文江のほかに見慣れない顔が囲っていた。山村留学をする咲の担任の多田静子だった。僕と咲の座るべき中心の席はあけられている。僕たちはガラス戸を背にしてまだ立っていたが、祖父は板で作った粗末な椅子に、腰を掛けるなり話しはじめた。

「今年の冬はどうもおかしいんだ。異常低温だな。それに雪も多い。三日前に、鹿の冬の餌場になっている沢に行ってみたら、雪が積っていて笹が見えないんだ」

「だからなのね、人里の村に降りてきて、交通事故に会うのは……」

薪ストーブに両の掌をかざしていた、まだ二十代前半の担任が、無造作に口を開く。祖父は口調を変えずに続ける。「山の奥は大雪で、鹿は餌をとれない。野犬の害や密猟も相変わらずひどいが、この大雪だと餓死するかもしれないな。鹿には受難の年だ」

祖父が話している最中に、冴子がぶ厚い扉を開けて入ってきた。彼女の顔や身体からは、子鹿の匂いが立ちのぼる。彼女は祖父の隣に立ち、胸をふくらましてから話し出した。「とりあえず、鹿たちを救うには餌を撒くしかないでしょう」

「いや、これも自然の力による淘汰かもしれない。鹿が増えすぎたことも事実だからな。植林の被害もすごいらしいな」祖父が加勢するように言うと、しばらくの間、沈黙が落ちてきた。薪ストーブの炎の音だけが聞える。

「空腹に勝てないのは、鹿も人間も同じなのよ。さあ、食事にしましょう」

祖母がジャガイモの皮を剥きはじめる。俎の上で切ったそばから、そのジャガイモを沸騰する湯の中に投げ入れた。大根も人参も玉葱も一緒に煮るのだ。さすがに豚肉だけは、後から鍋に入れることになっている。大鍋にいっぱい豚汁が出来上がる。古びた電気釜が暴れるように、湯気を吹き上げはじめる。

「先週、助けた子鹿が元気で、サキっていう名前をもらっただけでもうれいいわよね、咲ちゃん」

冴子は手を素早く動かして井を並べながら言う。彼女が何を言おうとしているのか、僕にはよくわからなかった。問い返そうと思ったが、彼女は豚汁が盛られた井を持って、咲の隣に座った。

咲は大きく頷き、今にも泣き出しそうな表情である。そのとき祖父が救いの言葉を向けた。

「これから一年間は、じっちゃんとはっちゃんの子どもだから、あの子鹿を育てながら、友だちたくさん作るべな、咲……」

「そうよ、これで、あたしも、毎週ここにくる理由ができたわ」

冴子は僕を一瞥し、顔を赤らめて楽しそうに笑った。

翌朝、『野生動物救護センター』所長の芝村典子、つまり僕の母親が、日大学農学部 of 学生三人を連れてやってきた。鹿被害の状況把握と、鹿駆除のための実態調査にやって来たという。

朝食を素早くすませると、僕らは山小屋を飛び出し、祖父を先頭に、一列縦隊をつくって歩き出した。

山は新雪に柔らかく覆われていたので、この辺りの山や森を熟知している祖父を先頭に立たなければ危険だった。雪が深くってラッセルのつらいところは、山岳部の若い学生

たち三人が先頭になる。冴子は僕のすぐ前にいる。母、典子は僕の後方からついて来ているが、相変わらず無口で、一度も僕に言葉をかけなかった。母は父と離婚する以前から、子どもには無関心であった。正確には、僕たち子ども

に無関心というより、自分の研究に没頭すると、他者には関心を示さなくなる。僕も咲も母から愛情をそがれた記憶がない。それでも僕は何度も後を振り返るが、母は相変わらず無言である。

冴子の後姿を追っているかぎり、迷うことはない。踏みしめるたびに鳴る雪が、新鮮だ。気温が低いので、雪は乾いている。僕は歩きながら、片手の手袋で雪をすくい口に含んだ。口の中で雪が溶けていく。その感触が心地よかった。

思ったより大量に降った雪が、何もかも追い払ってしまった。樹林のほかに生きものの気配はない。雪の斜面を押し上げてきた身体が、汗に濡れている。山の入口でこの雪ならば奥はもつと大雪のはずだ。鹿や兎やそのほかの動物たちが、食べ物に難儀しているのは間違いない。

一瞬でも立ち止まると、シャツの下の汗がぐんぐんと冷えてくる。カラマツ林の下を通った。上空が暗い枝葉で埋めつくされている。撃ち落された枯枝や枯葉が、足元にあり歩きにくかった。こんなカラマツの幹にも、鹿が齧ったらしく、ところどころ白い木の肌がのぞいている。これは見ようによっては、すさまじい生存への痕跡なのだ。

「こんなものいくら食べたって、消化できないよ。食べれば食べた分、腹が重くなるだろうにね」

全員がカラマツの幹のまわりに集まってくるのを待って、センター長の芝村典子が言った。

このカラマツ林は、山小屋からすぐ近くに位置している。ということとは、人里に近いつころまで鹿の群が降りてきたことを、僕は感じ取っていた。

裸木の間を雲が流れている。時折、淡い青空が見える。透明な光に導かれるようにして、僕たちは歩きつづけた。鳥が逃げていくのを何度か見た。羽撃きとともに、鳥は光の粉を振りまいていく。

野犬の姿が見えないのはどうしたことだろう。雪に恐れをなして、野犬たちも人里まで、降りていったのかもしれない。人に捨てられるまでは、町に住んでいた犬たちなのだろう。

「大丈夫かあ。天気はどんどん回復してくるからな」

同じことを何度も言う先頭の祖父に、全員従っていく。冴子は髪を毛糸の帽子の中に巻き込んでいたので、アノラックの襟の上に、時々白いうなじが見えた。僕はなぜかその白いうなじに、無言で励まされている。

彼女が踏んでつくった足跡に、自分の登山靴を入れて歩いていった。そのまま三十分も歩いたが、膝までの雪の中をラッセルしてきたので、たいして距離が稼げたとは思えなかった。

祖父の合図で、全員その場に立ったまま休んだ。それぞれの息遣いが風のように響く。

流れていく雲はしだいに遠くなり、空は明るくなってき

た。陽が射すと、雪の上に裸木の影ができる。再び歩き出した。雪の軋みの中に、遠くからせせらぎが聞えてくる。樹々の間から射した陽光が雪に跳ね返り、下からも照り返ってくる。僕は一定のリズムを刻んで歩きつづける。身体が汗ばんできているのを感じる。僕は身体も精神も、山に馴染んできているのがわかった。

カラマツ林の斜面を横に進んでいくと、行く手を深い崖にはばまれた。谷をはさんだ向かい側の白い山に、ややくすんだ灰色の裸木が並んでいる。祖父は崖の手前に立ち止まり、双眼鏡で対岸の山を眺めた。母、典子も同じような行動に出ている。双眼鏡は二人しか持っていないなかったので、他のみんなは遠い山を肉眼で望むか、祖父の姿を見ているかであった。

「やっぱり、ここに集まっていたか」

祖父は独り言をいうものの、なかなか双眼鏡を目から話そうとしない。僕は山に向かって視線を凝らすのだが、樹木は分かっても鹿までは認めるとはできない。母は双眼鏡で執拗に探しているようだが、まだ鹿を発見していないようだ。

「見えるかい」

ようやく双眼鏡を与えてもらったばかりの冴子に、僕は尋ねる。彼女は顔を左右に振るばかりだ。他の学生三人も母、典子から渡された双眼鏡で山を見ていたのだが、鹿を

確認できたのは、祖父一人きりであった。

「まったく、わからないわ……」

他の人と同じようにこう言って、冴子は僕に双眼鏡を渡してきた。地面から立っているはずの樹木は、雪に貼りついていていようである。樹から樹木へと視線を移動させる。しかし見えるのは樹と雪ばかりである。その他に生きものの気配はない。

「山の動物は山の色に溶けるから、そう簡単に姿を見せてはくれないさ。だが、あと十分もずっと山をにらんでいれば、見えるようになる……」

祖父に言われたとおりに、僕は山の方に視線を向けつづけた。反対側に流れていく雲の流れが速い。雲の動きにつれて、山は光ったり陰ったりしている。瞳の奥に痛みが溜って、僕はサングラスをかける。光の量に変化があっても、山はそのままである。その時冴子が腕を伸ばして、僕から双眼鏡を取りあげ、顔を動かさないようにして、じつと双眼鏡を覗く。

大声で叫んだのは彼女であった。

「あつ、鹿だ。鹿がいる。鹿よ。なんだ、鹿ばかりじゃないの。樹が生えているように、鹿がいる」

みんなが視線を向けたのだったが、彼女は凍りついたかのように動かなくなってしまった。冴子に見えているのに、自分に見えないのが、僕には理不尽に感じられた。

「ほら、一箇所をしばらく我慢して見ているのよ。そうすると大きさとか、色とか形とかがわかるでしょう」

渡された双眼鏡を目に当て、僕は冴子の声を聞きながら山を見つづけていた。

「見えてくるまで、そのままにいるのよ。山に試されると思……」

彼女の声が頭の横で響いてくる。この場には、まるで僕と冴子の二人しかないような錯覚に陥る。

僕は目の奥に痛みを覚えながら、双眼鏡をのぞきつづける。僕は子どもの頃のことを思い出して、泣きたいような気分になってきた。何がどうしたか訳もわからず、かつて暗い森の中で、これと似たようなことを、父としていた時があるような記憶が甦る。

「鹿だ！」

頭の中に思い描いていた影、視線がとらえると同時に、僕は言葉で反応していた。一頭の鹿が頭を振ったのだ。雪の中から鹿の形が現われてくる。すると鹿の形はその隣にも見えてくる。視線を横にずらしていくにつれ、鹿は鎖のようにつながって見えた。なるほど、樹々の間には数えきれないほどの鹿がいて、この山は鹿ばかりだったのだ。

「鹿だ！ 鹿だ！」

僕は歌うように口走っていた。横から伸びてきた腕に双眼鏡をとられて、やっと僕は我に返った。

「すごい数の鹿だ」

冴子に向かって、僕は熱に浮かされたように叫んでいた。それにひきかえ、彼女の言い方は冷静だった。

「やっと見えたのね。よかったわ。これで庸一くんも、一人前のウォッチャーね」

「山に試されているなんて言われるけど、試験でも受けているような気分です、思わず、真剣になったなあ」

僕は笑いに混せて、照れながらこう言ったが、顔は相変わらず正面にある白い山を向いている。すると僕の傍で双眼鏡をのぞいていた母、典子はそれをゆっくり降ろして、

はじめて僕の顔をまじまじと見つめ、大きく頷き微笑んだ。鹿の群がいると知った今では、山の表情は変わって見えなかった。その時遠くでエンジン音が響いてきた。祖父が谷の下の方を指している。僕たちはその方向を見た。僕は黒い点が二つ動いているのが認められる。スノーモビルである。二台ともプラスチック製の櫓を引いている。櫓には大型の鹿が縛りつけてあった。

ここにやって来てから、何頭の鹿の死骸に会ったのかと、僕は思い出してみる。密猟の櫓のついていた雄鹿が二頭と、他に針金の罠に掛っていた一頭を見つけた。発見した鹿の血はすでに凍っていた。その血の匂いが身体に染みついていて、今頃になって、溶けて空気に発散されているかもしれない。

「毎日、雪の山を歩いていただけ、助けたのは子鹿一頭だけだな」

「素晴らしいながらも、僕は冴子の返事を期待したわけではなかった。彼女も僕の心の内を知ったかのように黙っている。」

「あの子鹿だって、育つかどうかわからないさ。まして育つたとしても、山に帰れるかどうかわからない……」

「どうしたの？ 何を思い詰めているの？」

彼女が横からもたれかかってきた。

「いや、あの子鹿、これから先、つらいだろうな」

「生きようとするから怖いよ。助けたりなんかしないで、もつと自然にまかせるのが本当かもね」

彼女の言葉が転がり始める。本音の言葉が行ったり来たりすることに、なぜか僕は安堵を覚えていた。

「実のところ、よくわからないな」

「ね、来週、山の中の露天温泉に行きましよう。あたし、金曜日休めば、三日間、山に入れるわ。食糧を沢山持って、テント担いでいくの。あこがれるの。庸一さんと雪山で遭難しちゃうの……」

冴子は笑いながら言い放ち、無頓着に瞳を輝かせる。

彼女のふつくとした手の割に、先はすんなりとしている細い指を、僕は本当に美しいと思う。そして今、その指に触れたいというひそかな想いが、僕の内から湧き出して

くる。しかし実際には、彼女の手に触れることさえしなかった。

僕は確信した。彼女のことを少しわかったような気がする。僕が勝手に思い描いていた彼女の姿は、急速に崩れていったのだが、逆にそのことが僕に安堵を伝えた。そして僕自身にも、山で死んだ父の憑きものを落す必要があると思っただ。

だから週末は、冴子と一緒に山に入ろうと思う。僕たちはその準備のため、一度また札幌に戻ることにした。

空はかすかに明るみを帯びていた。奥のほうから光ってくる感じである。夜の闇から朝焼けに移行する街は束の間だが、鮮明に無機質な表情を見せている。まわりの家やアスファルトの道路が、銀色の粉のような霜で覆われている。僕は車体を覆っているカバーをはずし、丸めてトランクルームに押し込んだ。そこには昨夜のうちにに入れておいたザックやアノラックなどがある。エンジンも白い息を吐いている。バックミラーに、遠くからザックを担いだまま駆けてくる青いアノラックが見えた。僕は車から降り、トランクルームの蓋を開ける。

「おはよう。いつも元気なのね」

横に立った冴子は息を切らせていた。彼女の白い息を見て、僕は新鮮な気分になる。寝袋を縛りつけてふくらんで

いるザックを、背中から降ろして、トランクルームに入れる。言葉をつづけようとする彼女を、車に乗るように促し、僕は運転席につき、助手席のドアロックをはずす。左から

右に吹き抜ける風と共に、彼女が乗ってきた。

ふくらんだエンジンの煙で、後が見えない。彼女を助手席に乗せ、僕はヘッドライトの黄色い光を、道路にこぼしながら走る。表通りに出ると、他に走っている車もある。

しだいに速度を上げながら、僕は街を疾走している。鹿にでもなったような気がした。道路の両側には、樹木のようなビルが立ち並んでいる。そのビルは地中に根を生やし、見えない樹々の枝葉を空に広げている。

かつて遙か昔に、この地にも、群れをなして森を駆け抜けていた鹿たちも、今や森と共に消えてしまった。

ビル街が風になつて、後方に流れ散る。今の僕は、いくら走っても疲れというものを知らない。

走っても走ってもビル街が続く。

「本当はね、今日、庸一くんがくるかどうか不安だったの。あたし、まだ、今の庸一くんのこと、よく分からないしね」

高鳴っていくエンジンの音の中で、彼女は聞き取れないほどの小さな声で言葉をこぼした。

その時、なぜか、僕は人と人との関係は危うい均衡の上にししか結ばれていない、と口ぐせのように言っていた父の言葉を思い出していた。そんな父に反発していた僕は今、

意味もなく叫び出したかった。

「——そんなことはない！ 人はどれだけその人を強く思うかで、その関係は成り立つんだ」と。

空が明るくなるにつれ、雲が分厚く重なり、地上に向かって落ちかかっていることがわかった。暗鬱な雲である。空には灰色の海がある。その時、僕は間もなくコンクリートが割れて、ビルの中から樹木が出現し、たちまち街は太古の森になっていくかもしれないと、空想していた。

街中で悲痛な声を上げているのは、僕ばかりではない。

この街からそっくり人間が消滅すれば、アスファルトやコンクリートの割れ目から、草や樹々が頭をもたげ、森に帰ろうとしては抑圧されている植物の種が騒ぎ立てるだろう。ふと、一日のうちでその時間帯が、夜から朝になるはずなのだと思っただ。

そのうち灰色の空から、千切れ落ちてくるような雪が、道路を数センチの厚みで覆ってきた。道路が直線になるのを確かめ、僕は素早く顔を正面に戻した。灰色の雲の下に日高山脈がかすかに見える。

「曇っているのに、どうして日高山脈が見えるんだろうかね」

「遠くが晴れているからよ」

冴子はガラス越しの山に顔を向けたまま、籠った声を出した。降りしきる雪が、フロントガラスを打つ。道路の雪

が深くなるにつれ、辺りは静かになった。

「でも、雪山に入るには、どこかで、覚悟がいるわよね」
彼女が声を弾ませた。雪まみれの裸木を横に見て、僕はハンドルを切った。道路と雪の原野との境い目がわかりにくい。道は峠を越え、山を縦断しているのだが、除雪がされているので、祖父の農場まで走れるのだ。

前方にはカラマツ林の塊が見える。これからは二人だけで、あの山に入るのだと思うと、僕は身体の底から身震いのようなものが湧いてきた。

記憶は簡単に過去のものにはならない。月日や時間が解凍できないことが、この世には沢山あるに違いない。僕は雪山に奪われてしまった父の死を、自分で奪い返そうとする、不可能で自滅的な欲望に、彼女をつきあわしているのだろうか。

あのときの父の死には腹が立った。身勝手な死だと思っただ。今の僕に欠けているのは父の死を理解することなのだろうか。

相変わらず雪は吹き荒れ、光と影と雲を運んでくる。

歩き出そうとする牙子に僕は言う。

「ラッセルは俺がする。方向が違ったら後から大声を出してくれ」

カラマツの人工林がつづく。以前に、祖父たちが鹿を救

出しに入った森へと続いていたが、分水嶺は別だった。鹿

が走り抜けていく姿を見たような気がした。林道を通ってきただけなので、道は単純なはずだ。首から紐で下げたコンプラスで、方向を確認する。林道から降りようとした僕に、今度は彼女が声をかけた。

「輪かんじきをはいていったほうが、いいんじゃないかしら。今年は、いつもより、ずっと雪が多いみたいだから」
以前に祖父が言ったのと、同じことを言っている。僕は笑って頷く。風がないのが何よりの幸いであった。目は楽しいのだが、牙子の記憶を頼りの歩行は実際やってみると心細かった。柔らかな雪が積った吹きだまりに、輪かんじきごと足をとられ、以前のように僕は転倒した。彼女は僕の踏み跡をそろそろと這って、難所を越えていく。僕は一歩一歩注意深く足元を探っていき、振り返っては、彼女の歩行を確かめた。

カラマツのこんな疎林の中でも、僕は一羽だけ鳥を見た。名前の知らない鳥である。鹿の足跡も見えた。厳しい雪山に入れば、さすがに牙子より僕の体力の方が勝った。僕は背後から声を出され、立ち止まって、彼女が近づくのを待った。歩きながら彼女は決まってこういうのだった。

「こんなひどい大雪は、はじめてだわ」

僕は鹿が大量に餓死しているといった、以前の祖父の話の思い出ししていた。ひとたび吹雪けば、自分たちも鹿も動

けなくなるだろうが、自分たちはまだ食糧とテントを持っているから安心だ。

疲労とともに、前へ進むことしか考えなくなった僕の背後から、突然、牙子の声が響いた。

「着いたわよ。そこよ」

疲労のため、まわりを見る余裕をなくしていた僕は、彼女の声で我に返って顔を上げた。そこは両側から斜面が迫り、狭い谷になっている。目の前の雪山から、湯煙があがっている。よく見ると、小さな川はあふれ出しそうな水をたたえている。これが日方川の源流なのだろうかと思っただ。この水の流れを遡っていけば、山奥の岩の間で湧く一滴にたどりつくのだろうか。僕はなぜか心の内に、その一滴の水に帰りたいという欲求があることに気がついた。

「やっぱりここだったわ。多分、ここは十勝岳の火山帯と同じ水脈なのよね、きつと。だから、温泉が湧くのよ」

牙子は露骨に、自慢顔をして話しはじめた。その時、僕の口から声が漏れた。

「サキ……」

僕たちが助けた子鹿のサキが通りすぎたのだ。ほんやりした白い炎の中で、その子鹿は全身から茶色の光沢を放っている。細い四本の脚を踏ん張り、地面に口をつけている。僕とその子鹿までの距離は、およそ十メートルだ。母鹿がゆっくりと近づいてくる。そしてその子鹿の耳元で囁くよ

うな仕種をした。子鹿は顔を上げ、一瞬、僕の方を見た。

その時、僕は子鹿と視線を合わせたような気がした。その瞬間、四本の脚を交差させるように歩き出した母鹿の後をあわてて、その子鹿はついていった。途中から二頭の鹿は走り出し、弾むようにして、たちまち僕の視界から消える。

「えっ？ どうしたの？」

牙子は眠気をまといつかせた声を出す。

「サキだよ。あの子鹿がきてたんだ」

「まさか？ 庸一くん、それは別の鹿をみたのよ」

鋭角的な断面を見せる岩の露出した崖が、左右に迫っている。谷が広がっているのだが、相変わらず風の通り道なのか、雪は深くはなかった。表面にたまった雪のその下は、アイスバーンであろう。踏みしめた靴の底を、硬い氷が跳ね返す。

鹿の足跡は見えなくなった。だが僕は視線をこらす。

岩とも見えはじめた黒いものが点々と転がっている。だが、それらが岩ではないことに、僕はすぐに気がついていった。その黒いものに向かっていると、僕はまっすぐに近づいていく。やや間を置いて、彼女が悲鳴をあげた。最初に見えたのは、頭に立派な角をたくわえた雄鹿が横たわっている姿であった。角は氷の膜で覆われ、全身の毛の一本一本に小さな氷の玉がついている。輝きを失った鹿の腹は窪み、肋骨や腰骨が浮きあがっている。それは陰影のある四角形の

岩のようにも見えるのだ。

鹿は瞳を見開いている。その瞳も氷の膜の下にあった。

彼女は鹿には近づこうとはしなかった。

「ひどいわね、この雪じゃあ、食べるものがないのよね」

「群できて、ここで力尽きたみたいだ。たぶん、この雄鹿がリーダーだよ」

透明な氷に包まれた足元の雄鹿に向けていた視線を、僕は周囲に放った。そこには大小の黒い塊りが、点々と散らばっている。その数は数十頭もあるだろうか。風を避けてこの谷に逃げ込もうとしたのかもしれない。餓えてさえいなければ、ここで力尽きるなどということもなかったろうに。

僕は何度も視線をいつたりきたりさせた。

僕はやっと口を開き、喉の奥からようやく言葉を吐き出した。

「さっきのあれは、やつぱりサキだよ。山に帰ってきたんだ」

僕がすぐるような視線を彼女に向けると、冴子は悲しそうな目で見返してくるばかりであった。だが、その瞳は鹿のものと同じである。

冬の陽が山際に向かって落ちていく。それと同時に闇が駆け足で寄せてくるのがわかった。僕はテントに戻り、石油ランプを点ける。これほど闇の足が、速いとは思わなかつ

た。流れゆく時間の速度に、恐怖を覚えて僕は言う。

「だんだん淋しい風景になってきたな」

「あたしの計算だと、もうすぐお月様がでてくるのよ。そうすれば明るくなるわ。それまでじっとしてしましよう」

輝きを失った雪景色が見える。両側から迫ってくる黒い崖も、その間の遠くの白い山も、薄暮の光の中では血の気を失って、平板に感じられた。

なぜか、淋しさが身体の奥まで滲みってくる。白い光を漂わせた空が、ぐんぐん遠ざかっていく。

僕は視線を宙に漂わせた。光は空の彼方に遠ざかり、入れ違いに見えないものがやってくるのだ。僕は伸ばした指で、彼女の指に触れた。テントの向こう側には、暗い森がある。僕と同じように父も谷に入って、この森を見ていたのだろうか。耳に響いてくるのは、風の軋みとテントのはためきばかりだ。寝袋越しの隣にいる冴子が、指をからめてくる。

身体の内芯のほうに冴えてくる。それが深い眠りを邪魔する。僕は風の音を聞きつづけた。大地に当てた片方の耳には、懐かしい水の流れる音も聞こえるような気がする。どの音にも懐かしい思いが甦る。僕は遠い昔、山の中で父とこうしていたことがあったような気がしてきた。

ぬくもりを逃さないようにできるだけ、身体を丸め、冴子の指の感触を確かめていた。彼女は無言である。

楽しいような気分ではいられるうちに、僕は眠りに引き込まれていく。こうして眠ったまま山に帰っていくのも、悪いものではないと思えてきた。死ぬために山に入ったという父の意味が、なんとなくわかったような気がする。

しばらくして、突然大地が音を立てて揺れはじめた。強い風の音と共にテントが大きく傾く。そのうちはつきりとした爆発音のようなものを聞いて、僕は目覚めた。僕たちは手を取り合い、テントの中でそのままじっとしていた。闇は雪明りでほんのりと明るくなっている。風はますます強くなっていく。ゴーというなり声のような音を、再び鮮明に聞いた。僕と冴子はあわててテントの外に出る。灰色のものが大量に降ってきた。雪ではなく霧のような灰だ。おそらく火山灰だ。僕は腕時計を見る。午前〇時五〇分過ぎだ。

その時僕はなぜか、雪に覆われて餓死しかかっている鹿のことを思い出し、明日にでも救助しに行かなくてはならないのだ、と決意した。

翌日になって、携帯ラジオでそれが十勝岳の噴火だとわかった。僕にとって、この昭和六十三年十二月二十五日のクリスマスの夜は、忘れられないものになった。

僕たちはテントに戻った。

僕は身を硬くして、その気配を注視する。こんな夜更に

誰だろう。さつきからテントを打ちつけているのは、周囲の冷たい風のようだ。いや、うつぶせに寝ている身体に感じるこの響きは何だ。ふと確かめようと寝返ったとき、僕は目を醒ました。冴子も目を開けている。テントの隙間から吹き込む風があつて、それがしきりに皮膚にねばりつく。僕は四つん這いになって、彼女に近寄っていく。すると、彼女が顔を近づけてきた。なぜか彼女からは、ミョウガ独特の鼻先を刺激する香りがした。

「火山灰がひどく降りをはじめているかもしれないな」

僕は闇の中で目をすかしてみた。明け方近い闇は、まだ雪と火山灰とが入り混じっている。ただ火山灰の匂いが、さつきより少し濃くなっただけだ。

夢のつづきの動悸がまだしている。どれくらい時間が経ったのだろうか。またテントの入口を開けて、外に出た。すると思いがけず、外がもう夜明けの色になっているのに、僕はびつくりした。火山灰も、周囲の崖が見透せないほど濃くはなかった。それは樹々の色が、ようやく闇の中から見分けられるほどに浮き出した景色の中、ゆつくりと移動しているようだった。微かな時間と空気が流れた。

そのとき、谷底に影が走った。数十頭の鹿がなだれのように、川下の方へ走り抜けていく。

寒気が厳しかった。あわてて着込んだとつくりセーターの襟からも、編み目からも、容赦なくそれは突き刺してく

る。吐く息が重く、顔の周囲に貼りつくように凍ってゆく。空気の中に、火山灰の山塵のような芯がある。その火山灰は、人が歩くよりほんの少しだけ速く、上空を流れてゆく。すでにこの夜明けのピークはすぎているのか。それとも上空から圧し下げてくる冷気に追い散らされているのだろうか。谷底の川面は、鉛色に曇り、空の地表の景色の中で、そこだけがまだ明け遅れているように暗かった。

僕たちはやがて強くなる風雪を予想していた。が、いつの間にか、自分たちがその風景の中に馴染みすぎて、暗い森の景色の一部になり、脱け出しきれなくなってしまうようだった。

冴子はほとんど口をきかなかった。目を細めてしばたかせ、空を見上げながら、煙草を一本吸い、うつすらと火山灰がついた乾いた髪を撫でる。

僕と冴子はテントをたたみ、山を降りることにした。冷たい風が谷底に淋しく渦巻き、依然として、空を火山灰で黄色く汚している。

林道に出ると、踏みしめる雪道は予想より深い雪で、踵の上まで埋まってしまふ。陽ざしはなく、低く山稜の背後にも朝焼けの気配はない。空にはまた霜柱でも下りているような、濃く、一面に単調な灰色の火山灰が舞っている。よほど強い風が川上からでも吹き寄せてくるのでなければ動きはしない。

僕は本格的にゲストハウス「千栄の家」と山小屋の運営を任されることになり、大学はすっぱりと辞めた。咲は母親の元に戻り、冴子はなぜか祖父の牧場に住みつき、母の「動物救護センター」に通っている。

祖父は森の入口にある山小屋の傍に、父の墓碑を建てた。そして、その下に父の日記を埋めたという。春になると必ずその墓碑の前に、ガラス瓶に入れた紫のライラックの花束が見つかる。いくらかの土を掘って、瓶の底はきちんと墓の前に埋めてある。

その墓碑を見ると、昭和六十二年十二月二十五日と刻まれている。僕はその墓碑に刻まれた日付が、あの日と同じクリスマスだと気がついた。だが僕はそんな偶然など、簡単に通りすぎるつもりだった。笑って通りすぎるだけだ。だが、「ああ、そういうことだったのか」と思うことができず、僕は父の死の疑惑の何かをきつと探すことになるだろう。

その一年前に、実は死んだ父の日記によれば、部下だった熊谷冴子に研究所の隠された負の情報を流していたのは、父自身だったという。しかしそれがどうして露見したのか、父にもはつきりしたことはわからなかったが、父が会社を辞めることで、それは結着したという。

では、なぜ冴子はそのことを僕に言わなかったのだろうか。冴子への疑惑が深まる。

上空の鋭い寒気のため、粉雪よりもっと細かく砕かれた雪まじりの火山灰が沈殿してくる。夥しい泥流が繩のようにねじれ、沸騰しながら山肌を流れ落ちてくることを想像していた僕は、その期待を裏切られた。冬の十勝岳噴火にもかかわらず、火砕流や溶岩流が積雪斜面を流れても、大規模な泥流は起らなかった。だが五十数キロ以上離れているこの日方村でも、その火山灰による被害は甚大であった。しかも僕が心配していた通り、あちこちに餓死した鹿の死骸が散乱していた。

陽が射す日、この森全体がじんわりとぬくまり、雪が溶け、ぬれて泥濘のようになると、この鹿たちの骸は地の中に埋まってゆくだろう。そうしてひとときの眠りを眠り、いつの日か霜柱に押し上げられ地表に現れてくるのだ。それがもし息づくようなリズムをもってされるのだとしたら、そのことと本当に生きているということの違いはどのようなだろうかと、ふと僕は思う。

結局、僕は父の遺品であるカメラで、森や鹿の写真を一枚も撮らなかつた。

五月に入つて、菜の花や桜の花が咲きはじめ、日方村での生活に馴れると、僕はときどき冴子とあの森へ行つた。牧場には小さなマーガレットやスマイレが咲きはじめていたが、村全体はライラックの花盛りになる。

あの暗い森の風景を思い出すと、何かに衝き動かされて、僕は大声をあげたくなる。

僕はそんな父に対して、同情も共感もしなかつた。僕はこの村で生活をはじめてから、毎晩、ベッドに入る前に必ず日記をつけることにしていた。何度目かに、祖父から父の好きだった葉巻を貰ったとき、なんの気なしに、日記の余白に葉巻の胴巻シールを貼つた。それからもなぜか今日までつづけて貼るようになる。それは孤独なひとときの、手すさびのようなものだった。

それを知つた祖父は、父もかつて同じようなことを日記にしていたという。そうすることによって、父はあの山小屋での孤独を抑えていたのだろう。

両側が山に近いこの森は伐採により今、荒地になつていく。山は威圧するほどではない。森を囲む山は傾斜が急にあり、一気にせり上がっているように見える。

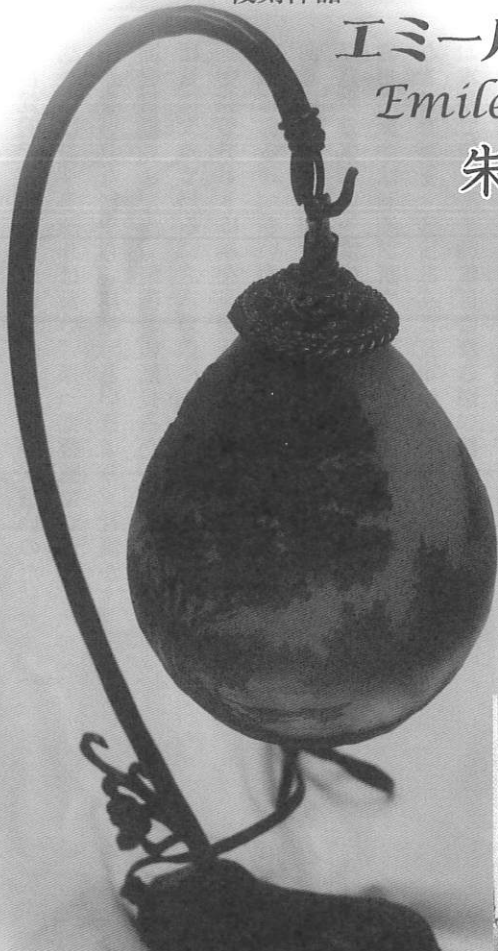
空の雲の動きにつれて、斜面全体が暗くなり、雲の流れが終るとまた明るさを取り戻した。だが見馴れた大きな雲が遠い風景を暗くする。

あの森から戻ってきて以来、僕はどういうわけか父のことを誰にも話さなくなつた。

第11回まほろば賞特別記念品

復刻作品

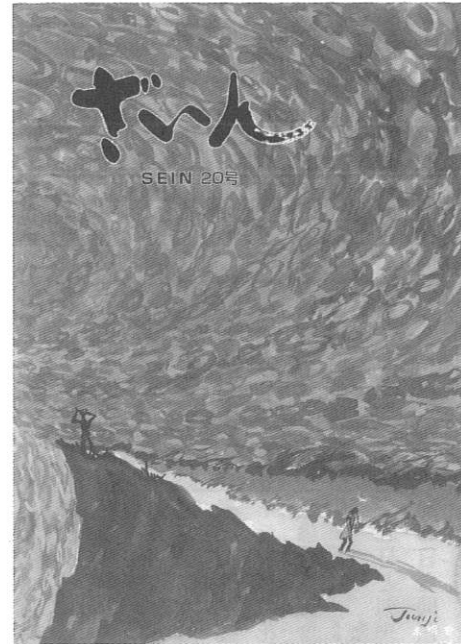
エミール・ガレ
Emile Galle
朱紅ランプ



木内是壽氏寄贈

まほろば賞も今年平成二十九年で第11回を迎えます。このたび前年に続き木内是壽氏の御厚意により、まほろば賞副賞に特別記念品としてエミール・ガレのランプの復刻品を御寄贈いただきました。エミール・ガレの幻想的な色彩表現と造形美の手法そのまま再現した「アール・ヌーヴォー ランプ」です。三色三層に重ねたアール・ヌーヴォーの代表作、幻想的な風合いが蘇ります。木内氏の「全国同人雑誌の小説創作に動む方々への励ましになれば」というお気持ちを今回もあたたくいただき、第11回今回の優秀作六編のなかから選ばれた最優秀作品まほろば賞受賞者に贈呈させていただきます。

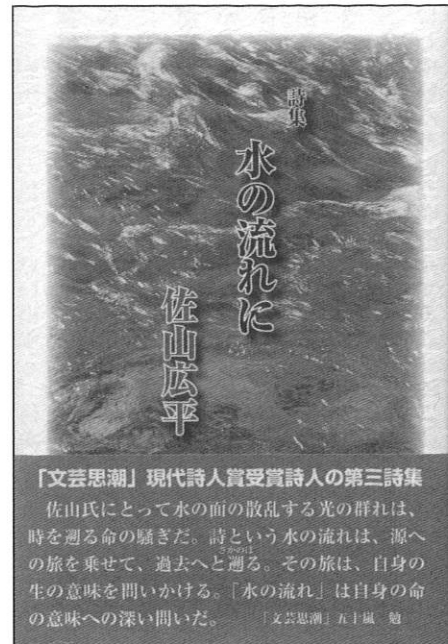
全国同人雑誌振興会



こしば きこう

1949 札幌生まれ
舞台演出家・劇作家

北海道大学大学院修士課程修了
現在「劇団 風蝕異人街」主宰・演出家



1620 円 (税込/送料共)



1620 円 (税込/送料共)

御注文はアジア文化社まで

清新と独創性

視覚的で歯切れのいい〈表題〉だが、重いのだ。誌是になる。手触りはない。探って朦朧でつかみ所がない。なにやら「誌是」というより、社訓か開発目標如きだが、清冽さの延長みたいで、大いに気に入っている。

文芸やアートはみな「清新で独創性」が目標の意識にある。「ざいん」は創刊からこれが願いであり、頑張り目印なのだ。意識が大きく、底抜けな過大で気に入っている。「ザイン」はドイツ語で「存在・現在」の意味になる。

本年度創立二十一年目になるが、数年来から列車で三〇分ほどの苫小牧市から、新同人が加わってきた。あの街はここ胆振地方の中核市で、人口は一七万人。北海道五番目に大きい。その街の文芸誌『響』と縁が結んだ。

文芸誌に「縁」は必要か。私は必要と思う。二つの誌が結ばれば、その円空は周囲に好ましい波及を及ぼす、と



苫小牧『響』同人と

信じている。「文学の出前」を試みたいものだ。創作は孤独な営為だ。厳しさはある。それでも心の連帯は必要だ。もうひとつ、創造のメッセー

ジは時には新風を及ぼす。多岐の表現媒体を膨らませるからだ。当市には「港の文学館」があり「室蘭文芸協会」が、文学活動の中核を担っている。芥川賞作家を三人輩出している。八木義徳、三浦清宏、長嶋有各氏で、文学への関心は高い町だ。そして、港町特有の先取がある。

『ざいん』同人を書く。年齢順で同人は一〇名だ。浅野清は評論を主軸にしていたが、小説や詩歌にも拡大して旺盛だ。朔太郎の評論で、室蘭文芸賞受賞。現在室蘭文芸協会会長。

おだ多朴は歴史小説に傾注してきた。緻密な時代考証を

積み上げ、その時代の歴史観を立ち上げる。室蘭文芸佳作受賞。室蘭文芸協会事務局長。

こしばきこうは演出家であり、秀でた文筆家「水槽の女」で全国同人雑誌賞まほろば賞特別賞受賞。旺盛な筆致で、形而上の世界にまで及んでいる。

守谷宏はプロの作曲家兼指揮者。含蓄ある音楽エッセイは重厚だ。音楽の魅力、音楽の懐の深さを示している。

さとう惇子は安定感ある文章で期待できる。北日本文学賞三次通過。開眼は近く、期待通り飛翔するだろう。

井村敦は昨年、北海道新聞文学賞受賞。井村は受賞文で「何があっても『生きる』ことを続け人間の逞しさを描写したい」と書いた。室蘭文芸協会副会長。当誌の編集人だ。中井ひろしは本年度室蘭文芸佳作受賞。アイヌと開拓武士との交歓を描いた九六枚の小説。

高岡啓次郎は素材は多岐で、才気旺盛。年に数篇（小説）を受賞。近年は、立川文学賞・北九州文学賞と才気迸る。青木円香はまだ三十代と若く、柔軟な文体が魅力。博物館の主任学芸員という専門職だ。（発行人／光城健悦）

ざいん 〒050・0071

北海道室蘭市水元町22・7 光城健悦方

☎連絡先090・2876・1409

井村敦さん 第49回北海道新聞文学賞受賞祝賀会



2015.12.02

井村敦さんの受賞祝い。中央近くは三浦清宏さん、井村夫妻と青山室蘭市長

シーランチの住宅

江平完司

サンフランシスコのベイエリアに住み四年近い時が経ち、大学三年の学期は真っ赤なレッドオークの葉が舞い落ちる十一月となった。私の大学のあるパークレイという街はサンフランシスコの対岸にある。

建築学科に入学してからの二年間、私には、数学、物理、社会人類学などの科目が重荷となり、デザインに充分な時間を投入できず、建築デザインでは優れた作品を造れなかった。三年の今期こそ、と、挽回を期すべく、月末の作品提出に向けて追い込みに入った。

十枚のA0図版を制作し模型はチップボードという厚紙を使用せよと作品制作要綱にあるが、私は金属を使う方針

だった。これは大学入学前に彫刻家の下に弟子入りしたとき以来の私の念願であり、金属との戦いのなかに独創性を見出したいと思っていたのである。

十一月二十一日にはすべての設計図版は完成し模型制作を残すのみだったが、課題提出直前に悪性の風邪で倒れ、高熱のせいで身体がまったく動かない。

「ついに落第か」

と思ったその運命の日、一九六三年十一月二十二日金曜日の午後、級友がアパートに駆けこみ、

「ケネディ暗殺、課題二週間延期」

と叫んだ。

その瞬間、私はほっとしてしまった。敬愛する大統領を

失い嘆き悲しむ人々をよそに軽率な感情の発露を恥じる羽目となったのだ。

高熱と風邪からようやく回復し外に出てみると、学内の国旗が半旗になっている。あらためて慙愧の念にかられた。

米国ではジョン・フィッツジェラルド・ケネディ大統領のことを愛称でジャックと呼ぶ。ジャック・ケネディはもういない。ジャックは昨年三月、このフットボール競技場で演説し、手を差しのべれば握手してくれるほどの近くを歩いたのだ。ケネディ大統領は、われわれ学生にとって特別な親しさを感じさせる若い政治家だったのだが、私は周囲の友人のように喪に服すこともなく、「課題二週間延期」に救われて模型制作に取り掛かった。

三年前、サンフランシスコのロシアンヒルに住み精神症を病んでいたころ、アンネット・ペリエという臨床心理士に救われるという出来事があった。そのアンネに建築学科入学を半年間遅らせて彫刻制作技術を習得すべきと説得された私は、その年の秋にカリフォルニア中部のビッグ・サーに赴き、ヘンリーという彫刻家のアトリエで金属工作の技能を履修したのである。習得した技術を使わずにして半年の学業の遅れをなんとするという強迫観念があったのだ。ビッグ・サー時代の木箱に保管してあった工具と金属片を取り出し、アパートの作業場で一週ほど夜を徹して作業

に打ち込み模型を造り上げるとベッドに倒れ込んでしまった。二週前の熱病の後遺症と過度の緊張で貧血を起こしたのだ。意識が戻ると、周囲はすでに明るく、完成した模型は窓際で朝陽を浴び燦然と輝いていた。提出期限は午後二時、まだ三時間ほどある。

建築学舎は木造建築の名手バーナード・メイベックの傑作であり、その気品ある大ホールに作品が展示されるのは初めての経験だった。ホールには三学年の作品群が午後の陽差しの中に整然と並んでいた。しかし、すべてが灰色のチップボード製なので地味な景観であった。

審査員として招かれた建築家と他大学の教授も集まっていた。これも初めての経験だが、高学年生の作品は学外専門家の講評を受けるのである。

私の作品はホール中央に設置され金属の輝きゆえに、ほかの学生の作品を圧倒する迫力に満ち、観衆が周囲を取り囲んでいる。見事な作品への賛辞はいかに、と歩み寄って耳を傾ければ、予測は外れ、批判のみが聞こえてくる。

「この模型は一見見事な出来映えである。しかし建築は彫刻ではない、金属は明らかに違反である」

「模型はチップボードという厚紙で造ると要綱にも指示されている。同じ材料で造るからこそ審査も平等になるのではないか」

といった意見がすべてだった。

金属は異端であり学生の反感をかったのだ。

実は、前年の二学年のときに似た経験をしたのである。

美術系大学の卒業生であるハジェットツという学生が独創的な粘土模型を提出したのだ。彼は制作要綱を無視し一枚の図版も提出せず、粘土製の模型のみを提出した。私はこの男の大胆さに驚き、こういった行動を、どう評価すべきかわからなかった。ところが教授と主だった級友はこれを褒めたたえ作品は最高のAを獲得した。しばらくして冷静さを取り戻した私は心のなかに彼の勇気を称えることにしたのだ。

なにゆえに今回は要綱違反が特筆されるのか理解に苦しむ。

粘土は許容されるが金属は不可というのか。

今回の批判には偏見を感じた。

一九六三年と言えば、日本が造る自動車やソニーのウォークマンなどが米国に進出し始めたところで、メイドインジャパンは世界の市場を席巻し安物の代名詞であり評判は概して悪かったのだ。しかし、そうした偏見もあるのかもしれないが、要綱違反を犯した私は、生真面目な学生として内心に忤怩たるものを感じた。

しかし、米国は不思議なところである。付和雷同、一辺

倒にはならない。非難する人あれば支持する人もいた。

学内の学生と教授が批判的な中で、招請された建築家と他大学の教授は私の作品を支持し、中でもバッド・ウィスラーというベイエリアで有名な建築家は審査陣の前に立つと、担当教授に向かってその姿勢を厳しく批判した。

「学内の慣例にこだわりすぎである。建築教育は自由でなくてはならない。学内の規定によって学生の才能をいたずらに摘んではならない。この作品には傑出した才能が感じられる。材質如何の問題ではない」

と言いつつ放ったのだ。

この意見は審査陣の支持を得て、担当教授はいたしかたなくノートに書き込んだグレードBをAに変更した。教授は凡庸な建築作品を造る建築家であり、取り巻きの学生たちにはAを与える人だった。

だが、私は喜びよりも、気色の悪いすつきりしないものを感じはじめた。素材に問題があることに、あらためて気付いたので。金属の作品表現には平等ではないなにかがある。

一年後の二月に、四学年が終了し、学業継続の危機が到来した。

「この先は送金できない」

という手紙が親からきたのだ。

サラリーマン家庭の限界だった。親はその理由を知らせることはしなかったが、土地を売って送金していたことは薄々わかっていった。しかし、まだ一年の教程が残っている。

レミンスター製手動タイプライターでレターをタイプし、外国人学生アドバイザーのミスター・スミスのオフィスに行った。

「日本からの送金によって本学建築学科に在学してきましたが、今後の送金が不可になりました。日本の大学教程は四年です。パークレイの建築学科は五年制ですが、四年間の教程を終了したので特別なお計らいでワークパーミットを発行願いたい。建築事務所で働き一年後に復学し残りの教程を履修したい」

スミス氏はタイプ文書を読み、

「君の請願を認め、ワークパーミットを出そう」

と言ってくれた。

サンフランシスコ市内で就職先を探すため、私は二日間かけて作品集を造った。出来上がった作品集は、写真撮影の仕方に誇張があり、実力以上に見えるものとなった。

建築事務所は、一般に五、六年以上の実務経験者を求めるので、われら新人は大変だ。ベイエリアのどこかにいったん勤めれば、その後はたやすく移動できるのだが、実務経験ゼロでは素性も分からず、雇い主にも不安が生じるの

だろう。教授に相談すべきところだが、日本のような研究室制度はなく親しい教授はいない。それに不器用な私は人に頼るといことができない。

仕事をくれそうな建築家が一人いた。以前、作品講評時に支持してくれたバッドという建築家が、「いつでも来てくれ」と言っていた。しかしそれは一年以上も前のことであり、バッドは奇人変人という評判だったので、余所の事務所から試すことにした。

第一番目は電話帳からランダムに選んだ中規模事務所だったが、運良く建築設計の部門長が会ってくれと言う。

彼に作品集を見せると、わずか十分ほどの面接で、

「午後一番にパートナー（役員）に決済をもらうので、午後電話するように」

と言ってくれた。ほほ決まりだ。

次に行った二百人ほどのカール・ウォーネキーという大型事務所では受付の女性に、

「わが社は、実務経験のない人は採用しません」

と断られてしまった。

大型事務所には特例はないのだ。心を落ち着かせるために、受付の待合スペースの椅子に座り、次ほどの事務所を試すべきかと、思案していると、偶然にも、奥から出て来たスマートな紳士が話しかけてきた。「日本に行ったばかりである」というこのインテリアデザイン部門長は、ピー

ターという名前であると自己紹介し、私の作品集を見ると、「気に入った」と言い、建築部門長に話を通してくれるとこのことで、

「午後、電話で連絡してください」と言うのだ。

犬も歩けば棒に当たる。二つの勤め先が午前中にあつたという間に内定し、拍子抜けした。日暮れまでは時間があるので、バッド・ウイスラーのところも試してみるかという気になったのである。

バッド・ウイスラーの事務所はパシフィック・アヴェニューのバーやナイトクラブがひしめく夜の歓楽街にあつた。波止場に近く強い風が吹く街区には煉瓦倉庫が立ち並び、歩道も狭く、街並みは暗い。この地域は「陋巷」といった感じだ。

ローリング・トゥウエンティーズというナイトクラブの隣にその煉瓦造の建物があつた。表のドアを開けて内に入ると、煉瓦の壁に囲まれたその空間は異様に明るく、青みがかった黒に塗装された鉄製階段が上方に伸び、はるか高みにある屋根の頂部から陽光が明るく差し込んでいた。ホールは光に満ち糸状に垂れ下がる淡い緑の蔦と天窓の白い棧が、写真で見たロンドンのキューガーデンを彷彿とさせる。階上は住居のようだ。

奥の方の明るい光のなかでバッドらしき人物がパイプを右手に持ち、こちらを鋭い視線で注視している。灰色の石畳みの床に私の靴の音がカーン、カーンと、甲高く響きわたった。

バッドは、威圧的で黒光りするデスクに座っていたが、同じく黒光りするパイプを燻らせながら、一段上のプラットフォームから床に降りてきて、パイプを使って、座るように指示した。手前には大型の皮のソファがローテーブルをはさんで向き合っていた。

バッドは五十歳くらいの目つきの怖い長身痩躯の男で、一年前、長かった灰色の髪は、十ミリほどの長さにカットされていた。髪が短くなって精悍さがまじったというよりは、高くそびえる鋭い鼻の上の目つきがより鋭くなったように、目をあわすことをためらうほどの威圧感を感じさせる。それでも、この男は、建築家らしく、センスのよいグレーのシャツに黒のサスペンダー、灰色のトラウザーを穿き、長い脚を組んでいた。

バッドはパイプの先で私の胸を狙い、こう言った。「やつと働いた気になったか。待っていたぞ。お前の作業場はつくつてある。あつちのコーナーだ。お前は協力事務所ということだ。仕事を留意して待っていたんだ」バッドは私をすでに雇い入れたような口をきく。

階上のどこかで、「カーン」という金属を叩くような音がした。

私は急いで正面にあつたガラス扉を開けて事務所の中に入った。内部は森閑としていた。高名な建築家なので、さぞ活気に溢れる事務所かと思えば、玄関ホールには人影もない。

高いがっしりした漆黒の受付カウンターが左に聳え、右手の石畳の広がりなかに、黒光りするバルセロナチェアと観葉植物が置かれ、グレーの床石は磨きあげられていた。無人なのに、清掃の行き届いたミステリアスな空間だった。

カウンターのの上を見ると、

「ピックアップ・ザ・フォン」

という命令調のカードが置いてあつた。

黒く重い受話器を取り上げた。

「はい」

という太い男の声が耳の中に響く。

「コウジと言いますが、バッドさんはいますか」

「コウジか、来たか、地下に来てくれ」

と言うぶっきらぼうな声が出た。

会議室とおぼしき部屋のドア近くに行くと、真鍮の手すりや鈍く光る階段がある。踏み面がなぜか明るい階段を下ると、ひろびろした地下空間に降り立った。

彼の発言の意味を理解せぬままに、私は作品集を見てもらうべく、前のローテーブルに置いた。

「お前の作品はすべて知っている。写真など見る必要はない」とバッドは言い、目の前の作品集には触れようとしな

い。私の作品を何ゆえに知っているのか、なぜ、せっかくの作品集を無視するのか、不気味だった。わずか三十分前に親切に作品集を見てくれたカール・ウォーネキー事務所のピーターというインテリアデザイン部門長のやさしい言葉が、空しく思い出された。この男は同じ世界の人間なのだろうか。

バッドの話はうわさ通り常識外れだった。給料は支払わずフィーを支払うと言う。私が学生ということを度外視した発言だった。

「まあ、心配するな。出来ないことをやれとは言っていない。責任感を持って仕事をやってもらいたいだけだ。うちの所員は全員独立させた。今では十人の独立した建築家が私の下で仕事をしている。お前は背番号十一番だ。お前は事務所がないので、特別ここに間借りさせる。フィーから家賃は差し引いておいた」

一方的にしやべるバッドに対し、話の間をついて一番肝腎なことを頼んでみた。

「もし、ここで雇ってくれるのでしたら、一年後に復学したいのでその後は半日勤務にしてみませんか」

これで、いくらもらえるのだろうか。バッドは私の気分をいち早く察知したのか、「フィー」について詳しい解説を始めた。驚くべき金額だった。

「そんなことは関係ない。仕事を請け負えば後は学校に行こうが旅行に出かけようが、仕事さえ期日内にやってくればよい」

現地見学の日程が言い渡された。手持ちのノートに日程を書きこみながら、午前中に内定したふたつの事務所は断らねばと一瞬はつとした。それでも基本設計のお金だけで九月の復学が可能になると気づいた私は、すっかり前向きな気持ちになってしまった。これが金目当ての軽率な考えであったことに気付くのは大分後になってからだった。

と思惑外れの意見を言う。
すれ違いのみがこの地下空間を支配していた。
強いパイプ煙草の香りが漂ってきた。パイプタバコは、本当に旨いのだろうか。香りだけっていう気もするが。

バッドは着手金を入れた封筒を差し出し、残金は業務完了次第支払うと言い、契約書らしき一枚の文書を取りだして署名せよと言う。私は文書の中身をざっと見ただけでサインしてしまった。

隣の打ち合わせテーブルに移るとファイルされた資料がテーブルに積まれていた。私の来訪を知らぬはずなのに、なぜ資料を用意していたのか、ミステリーそのものだった。業務内容の説明が始まると緊張した。これは、一人前の建築家の仕事ではないか。私に務まることなのか。

「必要経費としての理由が正当であれば追加の支払いも可能だ」

シーランチという太平洋沿岸の北方にある景勝地に大型の住宅を建てる仕事で、基本設計を二ヶ月以内に完成させるという。新人としての雇用を期待していた私の頭は混乱を極めた。

と言うと、バッドはガラス間仕切りで仕切られたコーナーに私を連れて行き、「お前の事務所だ」と言った。二台の製図台と事務机があり、コピー機と電話に休憩用のソファまである。いつでもここで仕事をしてよいとのこと。

渡された資料には、ユニフォーム・コード（連邦建築基準法）と地方自治体建築条例が細かく図解され設計開始の準備は整っていて、徐々に状況がわかってきた。樂觀的な私は基本設計だけならば可能かもしれぬと考え始めていた。

私は驚きで口を開くこともできない。
バッドは分厚いファイルと重たいブロンズ製の鍵を私に渡すと階段をパイプで指し示し、今日の話しは終わったことを告げた。

階段を上り受付カウンターの手前で腕時計を見るとこの事務所に来てから四十五分が経っていた。わずかに四十五分のあいだに驚くべき幸運が舞い込んだのだが、シヨック状態で喜ぶ余裕はなかった。

玄関ドアから外に出ようとして人とぶつかった。「失礼」と言ってみると大柄で魅力的な香りのする女だった。事務所の関係者なのか。怪しげな人である。

た。当時、私が憧れていたアイビーリーグの大学の授業料は、年間三千ドル以上だったので、州立大学で我慢せざるを得なかった。

両側に車がぎっしり駐車されたパシフィック・アヴェニューを夢遊病者のように歩いて行くと、フェンスに囲まれた侘びしげな有料駐車場があり、その奥の空間に、わがベルエアーが人待ち顔に佇んでいた。真っ赤なベルエアーの車内に入ると古い車の匂いがして少し落ち着きを取り戻した。周囲に人の気配のないことを確認し、胸のポケットから封筒を取り出し中身を確認すると、金額は千ドルを超えていた。学生の年間生活費の半分だ。百ドル札の真ん中でベンジャミン・フランクリンのとぼけた顔が右上方を睨み、明細スリップを見ると家賃と源泉税が差し引かれている。

ベルエアーのエンジンをかけた。
八気筒のエンジンが威勢よくかかると、元気が出た。ダウンタウンの分かりづらい一方通行の道走り、ベイブリッジ経由でパークレイに向かう。ベイブリッジは二段構造なので、往きは解放感あるアッパバー・デッキを走るが、帰りは下の暗い橋げたを走る。四レーンもの広い車道は鉄骨のトラスで支えられ、そのすき間から海面が見える。空は青く、海面は穏やかでブリッジの道路はすいていた。明るい海沿いの左端のレーンを時速六十マイルでゆつくりと走る。エンジン音は快調だ。一九五五年型シボレー・ベルエアーのエンジンは二六五キュービック・インチと大きく力強い。

バッドは二ヶ月のあいだに基本設計を完了させれば残額を支払うと言う。それだけのお金があれば来季の授業料を支払うことが可能で復学は間違いないと混乱の極致にある頭に言ってみせた。一年も復学を待たずにすむのだ。パークレイの学費は一学期三百ドルで、一年では六百ドルだっ

車で走るうちに少しずつ幸せな気分がこみ上げて来た。長かった学生生活を離れ、いよいよ建築家として働くのだ。アドレナリンが満ち溢れてきた。窓を開けて冷たい風を入れる。料金を通りぬけた直後、一台のフォード・コンヴァーティブルが右から追い越して行つた。古い灰色のオープン・カーだった。若い女が長い髪をなびかせながら運転していた。古めかしいくるまなのに、なぜか格好よい。私が運転すれば古いだけの車だが、不思議だ。

シーランチの敷地は、パッドにもらった地図と写真によると、サンフランシスコの南にあるモントレイ沿岸地帯に極似たバインの群生するリゾート地であり、専用の小型機滑走路がある、富裕な人たちの別荘地なのだ。

三月上旬の朝、サンフランシスコ湾の北に位置するリッチモンド・ブリッジをベルエアで走り、北方のシーランチを目指した。この長い橋を渡っているときは、海面など一切見えず、蒼い空とシルバーの鉄骨フレームしか目に入らない。ここは、いつも私に不思議な感覚をもたらす異次元空間なのだ。自然の景色から隔絶された空間を走り続けていると、知らぬ世界に連れて行かれるような気がしてしまふ。

橋を渡りきりハイウェイに出た。単調な景色にすこしいらいらし始めた私は、太平洋沿岸のハイマツの灌木と霧を見て、ほっとした。濃霧に覆われ先の見えぬハイウェイを、断崖絶壁から落ちぬよう慎重に走り、三時間かけてシーランチの指定されたポイントに到着した。

敷地は濃い霧に包まれていた。

どこから入ったのか敷地の中央に一台の白いリムジンが霧で霞む丘を背景にひっそりと佇んでいた。ベルエアを道路に停め、白い霧がまつわりつく岩とハイマツの間を歩いて行くと、パッドがリムジンから施主の夫妻と共に外に

模型ができたら風洞実験をするのだとパッドが言った。彼の影が周囲の霧にうつすらと映りこみ、この人物のミステリアスな印象をいっそう強めていた。すでに三回ほど会っているのだが、ボスである人が遠い存在であることを濃い霧が強調していた。

海からの風が強いのでリムジンの中に入って打ち合わせることになった。パッドを先頭に、夫妻に続いて車内に入ると、なかは暖かく、椅子は淡いクリーム色の皮張りで四人が座っても余裕がある。グレーの洒落たスーツを着た運転手が沈黙を守りフロントガラス越しに海を眺めていた。孤独な運転手と後部座席の間にはガラスの間仕切りがある。施主のヒューズ夫妻は如才ない感じの人たちで、パッドと私のあいだに存在する緊張感をやわらげてくれるように感じた。ヒューズ氏と何かと声をかけてくれる優しいような奥方に感謝の気持ちを抱いてしまふ。こうも印象の違う人たちとパッドが知り合いであることが不思議だった。硬い調子で無駄なことなど一切喋らず、必要不可欠なことだけを議題とするパッドが話を主導し、打ち合わせは三十分ほどで終わった。パッドは、二カ月後に図面と模型をチャイナビーチに持参し、夫妻と打ち合わせることを約束した。淡々とした説明ではあったが、その図面と模型はすべて私がこれから製作するものなのだ。間に合うのだろうか——私は一瞬、あせりを感じ、眼を窓の外に転じると、周囲の白い

出て来るようすが見えた。遠くに見えるパッドの姿は霧にかすみ、いつもの迫力ある姿には見えない。パッドの後ろは施主のヒューズ氏という人らしい。この人は、パッドの話によれば、サンフランシスコ市で投資会社を営む資産家で市内の西北端にあるチャイナビーチに住んでいるという。白い麻と思しきスーツ姿の、がっちりした体型の人だった。その後ろから車を降りてきた女性は夫人なのだろう。

自己紹介をして、大柄のヒューズ氏と握手し、白い毛皮コートを羽織った夫人との挨拶がひととおり終わると、私は海寄りに数歩移動し、丘陵地を俯瞰してみた。白い霧のせいでもあるのだろうが、北の広がりなかに隣家らしきものは見えず、丘は西の絶壁の突端まで繋がりが、その先は茫漠たる太平洋であるらしいことが分かった。波の碎ける音が地鳴りのように聞こえてきた。白い霧の中に黒っぽいシヨアーパイン（ハイマツ）が群生し、狐絶した景観に潤いを与えていた。

車に何かを取りに戻っていたらしいパッドは、白い霧の中から突如現われると、ついてくるように手招きする。ふたりで敷地のさらなる奥に行くと、ポードにはさんだ測量図を私の目の前に差し出し、家を建てる箇所をパイプの先で指し示した。その地点は岩場のでっぺんで、すぐそばに迫る松林で海が半分ほど隠れるということが確認できた。

霧は、さきほどより濃くなっていた。三月上旬のこの地域の霧は濃い。

早春の凍てつく空気が和らぎ、いくらか暖かくなった三月中旬の午後、私がパシフィック・アヴェニューの事務所に入って行くと、一人の女性が受付カウンターの後ろに座って仕事をしていた。イリーナというその女性と自己紹介を交した。今までは、私が午前中しか事務所に行かなかったもので、午後に出てくるというその女性との出会いはなかったのだ。今日からは、毎日朝から夕刻五時までは事務所に詰める予定だった。

この女性は、私が初めて事務所を訪問した時に玄関先でぶつかつた人だと言うのだ。初対面なのに笑顔でコーヒーをお持ちしましょうと言う愛想の良い人だった。大柄で背が高く鋭い鼻を持つウクライナから来たその女性は透き通るほどに白い肌の美人で愛嬌もあるが、三十を過ぎてそろそろ横幅が目立ち、いずれ太った魔女になるに違いない。人種偏見を感じさせない、ユーモアの分かる女性だった。初対面にもかかわらず、ひと気のない所内で雑談に時を過ごし、その日は夕刻まで仕事を手につかなかつた。その後も会うたびに彼女と親しく接し、挨拶代わりに軽くハグするほどの仲になった。米国に七年もいるおかげで、女性の扱いがいくらかはうまくなったのだ、と自信を持った。

イリーナがどう思っているのか、まったく霧の中だが、彼女の親しさは特別だった。歳下の人間に対し、弟のような気持ちを持ったのかもしれない。

イリーナはソ連邦のウクライナ出身で一五〇年代に米国に渡って来たという。どのように市民権を取得したのか、結婚したのか離婚したのか、はたまた、どうやってバッドと知り合ったのかなど、一切話そうとしない。私は秘密だらけの彼女を元KGBであるとなれば冗談で断定した。バッドとの連絡は彼女がすべて取り仕切っているらしい。

バッドの人物像についてはイリーナが、会うたびに少しずつ教えてくれた。初めは、その略歴を、次第により深い話を、という具合に話してくれた。

東部ニュージャージー州生まれのバッドは大学を卒業すると英国に渡り建築事務所勤め、その地の女性と結婚したのだが、一九三〇年代の終わりに欧州で戦争が勃発すると、米陸軍の航空機隊に志願し、ドイツ本土の爆撃に参加した。激しい戦闘の中で爆撃機が被弾し帰還時に不時着し、身も心も傷つき、病院に入院した。数年後には退院したのだが、離婚し、戦後に米国に帰還した。二十年以上も前のことだ。仕事以外は雑談をしない寡黙な男なので、イリーナの情報は貴重だった。なにゆえにイリーナがバッドと知り合ったのか、謎のままだった。

基本設計を進める中で、私はバッドと激しく議論することになった。日本では、たぶん、上司と言い争うことなど

ない時代だったのだろうが、米国に七年もいる私は、いつのまにか自己主張の激しい理屈っぽい男になっていた。自分が経験不足であることなど度外視して、正しいと思うことを追求することが正義であるという若い米国の学生にない、くびを覚悟して議論に臨んだ。かたや、バッドは私がデザイン上で妥協した点を容赦なく責めた。当たり前のことではあるが、実務経験のない私は、負け戦の連続で、毎日が混乱と煩悶のなかに生きるようになった。なにゆえに、こんな形で仕事をせねばならぬのか。初めて就職した者は、研修生として大事に扱われるべきではないのか。後悔の日々となった。

米国における建築教育は、理想主義をベースにしたものであるのだが、バッドの建築に対する信条というものは、私には常軌を逸していると思えるほどのものだった。徹夜して画いた図面やスケッチをバッドの机のローテーブルにひろげると、バッドは、これはだめ、これはよし、と隣時に手にした太い製図用エンピツで、NGマークやチェックを入れる。まさに、情け容赦のないその様子は、地獄門の審判を想起させるほどだった。感情の激することのないこの人は、冷静に物事を進めるのだが、ときたま、下を向き、

私がある場に凍りついていると、

「なにか、もう少しましな案を持ってこい」

と言ったとき、自分のデスクに戻って自分の仕事を始めた。

激した後に、人を完全に無視し冷静に仕事に戻るバッドという男は人間の感情を持たぬ人のようだった。

私は同じ地下室のすこし離れた仕事場に戻った。事務所を辞めるしかない、と考えるうちに椅子に座ったまま眠ってしまった。深夜作業の疲れが出たのだ。

肩を突つく気配ではっと目を覚ますと、イリーナがそばに立っていて、コーヒーのいい香りがした。

「どうしたの、バッドにやられたのね」

優しく自分をやりわり強要する元KGBの女に私は意気地もなくすべてを白状してしまった。

「浴室が気に入らないって、そりゃそうだよ、この家は別荘なんですよ。月並みな浴室じゃあ駄目ですよ。バッドの期待しているのはあなたが考える独創的な浴室なのよ。分かったことじゃないの」

そういうとイリーナはなにを思ったのか私の頸に手をまわして顔を近づけて来た。彼女の透き通るような皮膚が近づくと視界がぼわっとなって濡れた唇が迫って来た。私は虚脱し椅子に座ったままだった。膝の上に女がまたがり唇

いくらか苦しそうにする。この人はイリーナが言うように戦争以来心臓に持病を抱えているのだ。打ち合わせ時間は、十分を超えたことなく、膨大な仕事量を幾多もの協力建築家を使ってこなしている様相は、常人の耐えられるレベルではないとも思い、身体のケアなどはしているのだろうか、と心配になる。イリーナもそのことを心配しているのだが、雑談などしないこの変人には、イリーナとて、なすすべはない。スピードを旨とする仕事のなかに、無能にして半端な存在の私には、同情の気持ちなど持つ余裕などなかった。何回も打ち合わせを重ね、平面形の最終の形がしだいに整いつつあった。

最終段階の平面図を仕上げ、打ち合わせに臨んだとき、それは訪れた。予想もせぬ部位に関し、バッドは拒否反応を示したのである。なんと浴室のデザインが気に入らぬというのだ。私は平面図を仕上げたときに、深い考えもなくスタンダードな浴室を提案したのだ。これは米国では常識なのだ。

バッドは、図面が目の前に広げられると、わずか一秒に満たぬ間にこのことに気付き、よほど気に入らなかつたと見えて、私が、数日間徹夜で仕上げたほかの部分など一切見ず、パイプをテーブルに放り投げると、図面を部屋の隅にある暖炉に持って行き、火をつけて燃やしてしまった。燃やされたのはなんと一枚しかない原因だったのだ。

が合わさると、上体が後退して車付きの椅子が動いた。私は慌てて女の上半身を受け止め、女の身体の重みを感じると頭より先に下半身が急激に反応した。セックスのない生活が続いていたからだ。

気配を感じるとイリーナは意外にも、そっと起き上がり、スラックスの太もも辺りをパンパンとはたいてから言った。「元氣出してね。私はあんたの味方だから。今日はもう帰りなさい」

と言って、あつという間に居なくなった。コーヒーと女の香りがまだ残っていた。欲求不満のまま取り残されたことに気付いたが、もう遅い。コーヒーをひとくち飲んで身辺を片付け必要な図面などをかばんに入れて事務室を退出した。

その後の作業はすべて自分のアパートで行なった。

二十四歳の男が、恥ずかしくも怯えていて事務所に行くのが怖かったのだ。イリーナの援護射撃がなかったら、事務所をやめていただろう。

バスルームだけではなく平面全体を画き直した。準備はできたのだが、バッドが出張中なので数日間待たねばならぬ。

浴室は、ビッグ・サー時代にバイクで行ったライムキルン州立公園の小さな美しいターコイス池をイメージしてデ

はいまだ解明されていない。

その後も誤解による困難な局面が多々あり、私の無能のために二ヶ月間の期限を一ヶ月も延長する始末となった。

六月末には最終模型が出来たが、コミュニケーションの難しさをこれほど痛感したことはない。もう七年も米国にいるが会話能力には限界を感じる。もつとも、バッドは言葉を弄してものごとを理解させようとはしない。なにごと自力で這い上がってくるのを待つという風で、よく考えれば、英語力のせいだけではなかったのだ。

厳しい目で図面を眺め、その考えの不備を徹底追及される日々が続くと、才能のなさ、創造力不足、という致命的欠陥を見る思いがして、建築家としての活躍どころか、あきらめと絶望の淵に立つみずばらしい一人の異邦人のような気がするのだ。しかし、たまに見せるバッドのわずかに肯定的な目線の中に、独創性に優れたものを造るには、常識を疑い、すべてを一から考えなおさねばならない、というところを察知した。

イリーナが、事務所のミステリーを解明してくれた。

事務所には調査チームが存在するというのだ。個人の動向は施主やほかの協力者と同じくバッドが雇用する調査員によって細かに調べられ、どこにいていつなにを予定しているのか、すべて調査報告済みというのだ。私は見張ら

ザインした。通常の倍ほどのスペースに浴槽を中央に据え上から光が落ちる部分に湯が流れ落ちる小さな滝を造り、浴槽の仕上げは特殊な素材を滑らかな曲面に砥ぎこむ仕様とした。模型を造り小型電球を仕込むと、天窓から照らされた空間が森の中の小さな池のように浮かび上がり、見たこともない浴室となった。

浴室を大きくしたので平面計画がご破算となり、すべての図面を画き変えてみれば、不思議なことに前よりゆとりのある優れた案が出来た。打ち合わせのときに、バッドが発したある言葉を思い出した。彼はこんなことを言ったのだ。

「破壊を乗り越えるとき、傑作は生まれる」

一週間後に、バッドにバスルームの模型と新しい図面を見せると、彼はなにも言わずに細かな修正を指示した。修正箇所は、多すぎる曲線を直線にするので、空間が簡素に上品になるということだった。家に帰ってから、模型を修正してみれば、バッドの鋭い洞察力に改めて感動した。その場では、気に入らぬ意見であっても、すぐに反論せず、持ち帰って吟味すべきと反省した。

打ち合わせが終わり、バッドのいくらか柔らかい表情を見て、ほっと溜息をついて事務所を後にした。しかし、バッドとの先日のやり取りはその後長くトラウマとして残った。何もかもお見通しという人所以来の組織のミステリー

れているという恐怖を覚えた。

イリーナは無人の事務所では不可欠なことで恐怖を持つ方がおかしいと言い、元締めは、なんと彼女自身だと言った。元KGBであることは、もはやジョークとは言えない。

見張られているという感觸は残るものの、ほかには話す人もいず、バッドとの唯一の仲介者であるイリーナを避けるわけにもいかず、所内でコーヒーを飲みつつ彼女との雑談は細々と続いた。そういえば、あのバスルーム事件以来、彼女はなんとなくよそよそしい。私は、彼女へのひそかな想いを断ち切るべく、当時パークレイで付き合っていたガールフレンドの話をし、イリーナはホゼとの仲を打ち明けた。そして徐々に恐怖感は薄らぎ、もとの親密さが戻ってきた。

ホゼはスペインのバスク地方出身で、工務店の社長でもあり、バッドとは長い付き合いだとイリーナは言う。一度しか会っていないが、がっちりした力の強そうな小柄なフランス人という感じの男は紹介された際に、いくらか恥ずかしそうに振る舞い、その言動から、素朴な人という印象を私に与えた。シーランチの住宅も彼が工事を担当するらしい。ホゼの話になると女の顔はすこし赤くなり冷徹な情報総括責任者は少女のような心を露呈した。どうもロシアとかウクライナの女は少し子供っぽい。ホゼのことを聞いて、キスと突然の退出の真相が分かった。

図面集と模型を入れた木箱をベルエアーに積み込みチャイナビーチに行く日が来た。バッドは車を持たず運転はしない。イリーナに言わせれば、戦争以来操縦はやめたとのことだ。

ベルエアーで事務所の前に来ると、イリーナがトランクに模型の箱と図面集をそっと入れてくれた。外光の下でイリーナを見るのは久しぶりだった。陽の光を浴びた彼女の肌はいっそう白く輝き、十歳も若返って娘のように見えた。今朝は、白のワンピースを着てウエストもしまつて見える。彼女が歩道に戻ってにっこり笑うと、その後ろからバッドが出てきて、

「わるいが、今日はうしろのシートに座らせてくれ」、

と言って、後部座席に乗り込んだ。その間ほんの二分ほどのあいだだったが、後ろには二台もの車が迫ってきていて、イリーナの笑顔がなければクラクションを鳴らされていただろう。

車で混みあったダウンタウンを抜けて広々としたゴールドゲイトパークに来ると田園風の住宅街が広がる。ヒューズ邸はもうすぐだ。バッドが後部座席で沈黙を守ったままなので気になった。何回かバックミラーを覗き見るが、疲れている様子で顔色もさえない。今日は、いつもより年老いて見える。

イリーナは、先日、こんなことを言った。

「あんたは、バッドが厳しすぎると思ってるみたいだけど、私が見る限りでは、そんなことはないよ。昔のことだけど、バッドは人を殺す寸前まで行ったことがあるのよ。バッドがああいう風なので、猛り狂った若いひとが事務所を持ち込んだナイフでバッドを刺したの。バッドは殺されそうになった時、鉄の丁定規でその男の頭を殴りつけたのよ。男は救急車で病院に運ばれ、初めは致命傷と言われたけど、幸い命を取り留めたわ。バッドの傷も重症で、市警察の調査の段階でバッドの正当防衛は認められた。あれ以来バッドはずいぶん静かになったのよ。あなたの図面を燃やしたなんて暴力行為にも当たらないわ」

車で混みあったダウンタウンを抜けて広々としたゴールドゲイトパークに来ると、緑の多い田園風の住宅街が広がる。チャイナビーチに来ると、バッドは眼を開け、ゆっくり行くように言った。ヒューズ邸はもうすぐだ。街路上に表札は出ていなかったが、バッドの指示で右手に曲がり、砂利敷きの邸内道路を行くと、森の向こうに大きな家が見えてきた。明るい陽光の広がりがある屋敷の前で車を降りると、波の打ち寄せる音が聞こえ、磯の香りが海が存在を知らせる。

玄関にはメイドが出迎え、明るい応接室に案内してくれた。ヒューズ氏はすでに待っていて、すぐに夫人も現れた。

アレクサンダー・ヒューズ氏は家の中で見るとことさらにたくましく見える白髪の男だった。ヒューズトンから三十代でベイエリアに来て投資会社を始め、四十代でこのチャイナビーチに移り住んだと言う。健康そうで顔は陽焼けていた。ヒューズ夫人の名はリズといい四十代前半のグレーの眼が印象的だった。

明るく広い応接室は海の絶壁に面し、高さ十フィートのフレンチドアの外には広々としたテラスが連なっている。テラスの先にはハイマツが崖の縁まで続き、ゴールドデン・ゲートウェイの海面が陽光を反射して金色にきらきら輝いていた。ヒューズ氏の誘いでテラスに出ると、強い風のなか右手に赤いゴールドゲイトブリッジが見え、対岸の緑の半島を目でたどると小さな灯台がある。

ヒューズ氏がそばに寄って来て、

「あの灯台を見るなら、これを使いなさい」

と言って大きな双眼鏡を手渡してくれた。

双眼鏡を覗き見ると、中央にその灯台が浮かび上がり、ガラスが宝石箱のようで、黒色塗装の円蓋屋根の上に黒の玉飾りが見える。数年前に師事した彫刻家ヘンリーの金属製の彫刻に似ていた。

七年前、乗船した大同海運の高武丸がここを通過したはずなのだが、夜中だったのでこんな灯台があるとは知るはずもない。

声をかけられるまで手すりに肘をのせ双眼鏡をのぞいていた。

ヒューズ夫妻はソファに座ったまま、私を待っていた。バッドもソファに座って目を閉じていた。

「すみません。お待たせしてしまつて」

夫妻はにっこり笑って、

「景色を気に入ってもらって光栄です」

と言った。

私から説明するように、とバッドが言うので、図面を開き、平面を説明し、屋内の構成に問題はないか確認した。

ヒューズ夫妻は模型が気になるとみえて木箱の方ばかり見ている。説明が細かな部分に及ぶと夫妻は私の説明をさげざり模型を見せてくださいと言う。木箱の蓋を開けると、二人は模型を見る前に木箱の造りが気に入ったとみえて何回もその蓋を上げ下げした。

模型は金属製ではなく木製だった。一年半ほど前に課題で制作した金属製模型が学内で評判悪く、それ以来金属はやめた。木には温もりがあり人は木に愛着を感じるということを発見した。木製の模型は学内でも評判となり私の四年の作品群は高い評価を獲得したのだ。

ヒューズ夫妻は模型に感激した。

浴室の小さな模型内部の照明をつける時に、子供だましのような気がして気が引けたのだが、模型を覗き込む夫妻

が感動した様子だったので、ほっとした

バッドがソファに深く座ったままパイプを吸って沈黙を守っているの、仕方なく図面に戻って細かな諸点を今一度説明し、

「なにか問題はありますか」

と、二人に聞いた。

「詳しい説明をありがとう。今までにも建築家にお願ひしてきましたが、こんなに立派な模型を見たのは初めてです。素晴らしい出来映えですね。あなたが造ったのですか。すごいですね。こんな技術を大学では教えるのでしょうか」

私は、大学では技術などは教えない、と言ひ、すこしだけビッグ・サーの彫刻アトリエでの経験を話すと、ふたりは真剣に聞いてくれたが、それ以上の話はなかった。

住宅の設計は初めてだが、なにゆえに質問が少ないのだろうかと不審に思つて、帰りに、バッドに聞こうと思つたのだが、チャイナビーチで車に乗ると、すぐに、バッドから翌月から実施設計に入るようにと指示されたので、余計なことは一切聞けなかった。いつものことなので、帰つたらイリーナにその辺の事情は聞けばよい。

パシフィック・アヴェニューの事務所に着くと、バッドは、構造と設備の協力事務所の連絡先を書いたメモを渡し、イリーナに完成した図面のコピーを順次渡すことを命じた。それらが一通りすむと、フィーの残金が入った分厚い封筒

をくれた。三千ドルもの現金など見たこともなく、なにゆ

えに現金払いなのか不審に思つた。三千ドルは為替レートでは百八万円なので、東京の商社で部長である父の年収の半分ほどになる。もう学費にはこと欠かない。九月の大学復帰を確信した。お金をもらうと、それまで疎ましいだけの存在だったバッドに好感を抱いてしまい、節操のないわが氣質に呆れた。

九月に五学年に復帰した。

大学本部ビルのスプラウルホール前に来ると見慣れたキャンパスの光景は七か月前と同じはずなのだが、なぜか安っぽく見える。

詳細設計の段階に入ったのはいいが、学業との兼ね合いで、毎日がとんでもない過密スケジュールとなった。一日にやるべきことをカードに書き出すと三十数項目がならぶ。半日は事務所、あとの半日は大学で過ごす。生活は慌ただしく、日用品ですら買うことがままならない。カードを十五分ごとに取り出し、用件を確認しながらのせわしない生活となった。

建築の詳細図を造る経験はなく、気のみ焦るばかりだ。

あたりまえのことだが、大学では理論を重視し、実地の詳細設計などは教えない。ディテールをスケッチしては清書

し、図面のコピーをイリーナに渡し、バッドの赤線入れを待つ日が幾日も続いた。数日後には真つ赤に朱のはいつた図面が戻ってくるが、赤線と読みづらい文字を判読し図面を画き直す作業は至難の業だった。バッドの赤鉛筆の文字は読みにくい上に、まるで謎かけである。たとえば、「お前は雨水の流れを知らない」とか「窓の機能はなにか、内から外を見るためか、外から眺める人のためか、換気のためか、明りが必要なのか、風を入れるのか、はつきりした目的を持って」などと書いてある。身体の具合でも悪いのかと思うほど、ひどい殴り書きのような難解な注釈はイリーナがいくども電話で聞いて仲介の労を取ってくれねば理解できぬものであった。バッドのしごきは大学の建築教育の厳しさを超えるものだった。

イリーナは、私がバッドとの対話に苦勞していることを知つていて、私が落ち込んでいると救いの手を差し伸べてくれた。彼女は、私のことを弟と思つていふと言ひ、私がバッドという人物をすこしでも理解できるようにと、折を見ては、知つていふことを話してくれた。バッドという人物をよく知れば、その難解な意見を理解しようとする気持ち

が私の心のなかに生まれる、と考えたようだ。彼女の話によれば、バッドは戦時中に、ある不幸な事件に遭遇し、心に癒しがたい傷を負つたというのだ。

「バッドが陸軍に志願したのは一九四二年のことで、陸軍

の航空隊が欧州戦線に本格的な爆撃を開始した年だったのだけれど、彼はその翌年の一九四三年の初頭に、初めてドイツ本土の爆撃に行つたのよ。そのころの米空軍の司令官たち、スパーツ將軍とかイーカー將軍は、「米軍は、日本軍、ドイツ軍、英国軍のように、密集した住宅地などを爆撃することはない」と断言していたのね。イーカー將軍は、『俺たちが、街にいる一般市民に爆弾を投げつけた、なんて、後世に批判されることだけは避けたい』、と言つていたのね。そのころの爆撃手は、そんな命令を受けて、それは、それは、困惑したらしいのよ。なんていっても、高度から落とす爆弾にそこまでの正確さは求められないのよ。バッドは爆撃手ではなくて、操縦士だったのだけれど、正確な爆撃には操縦士の役割が大きいらしいの。彼が一九四三年の春に爆撃機をドイツ本土に飛ばし始めてから丁度六ヵ月後のこと、ドイツ本土の爆撃から帰還してすぐに司令部に呼び出されたの。彼の機が投下した爆弾のひとつが、風に流されて、不運にもベルリンの北部にある大きな病院の真上に落ちたと告げられたの。彼も、もしやと思つていたの、その懸念が的中したわけ。司令部の意見では、『これは不可抗力の事故であつて、お前には何の責任もない。間違つても、ジャーナリストたちに自分の責任だつ

た、などといわないように」と説諭されたのだけど、これは、パッドの心にずうつと残るトラウマとなったの。爆撃してしまった病院から逃げる人々の中に、ロンドンにいる自分の娘と同年の子たちを見た気がして、そのことが出撃のたびに浮かんで、精神症にかかってしまったの。英国本土への帰還のとき着陸に失敗し大怪我をしたのね。怪我だけではなく精神症のためもある、軍の病院で二年と三ヶ月間も療養したの。そのために家族も失い、退院後も東部の故郷には戻れず、西海岸に単身で移住してきたわけ。パッドが言っていたわ、『俺は戦争で何百人もの人たちを殺した。祖国を守るためとはいえ、建築家のなすべきことではなかった。しかし、殺してしまった人たちを生き返らせるわけには行かない。戦後は、よい建築を造ることで、罪滅ぼしをしたい。わが建築の中に住む人たちのために、ほのぼのした生活環境を実現し、平穩に暮らしてもらおうことだが、俺の心を救う唯一の手立てなんだ』とね」

戦後派の私にとっては、そんな二十年以上も前の戦争のことなど想像もできないことだったが、イリーナの話を聞いて、中国から引き揚げてきたときに見た東京の焼け野原の光景がまぶたに浮かび、大人になってから広島を訪問したイリーナと分かれてからも、しばらく無言で広島を訪れた昔のことなどを思い出すうちに、パッドが爆撃した病院か

ら逃げ惑う被災者の姿などを想像して、なにか自分が責任を問われるような気分となった。そして、建築とは真逆の破壊行為に参加してしまったパッドに、どういうわけか、同情の念を覚える自分をその場に見出した。どちらかといえば、広島に爆弾を落とした側の人間に同情を感じるとは理不尽なことだと思いつつも、パッドの悲しみを、いくらかは理解した気持ちになったのだ。それは、いつもの冷酷無比なパッドの言葉からは想像もできないことだったのだが、心に傷を持つ人は、制御できずに、つい言葉の端々に、その毒がにじみ出てしまうのではないかと、気付いたのだ。

五年間は卒業設計となるはずだったが、建築学科の組織改革が進行中であり、教科は今までに学んで得た知識を総動員し、ひとつの建物の設計図書を作製するという演習課題に変更された。

五年を六年制に格上げする学制改革が進行中だったので、教師たちも来年の処遇がわからず動揺を隠せない。建築学科を大学院レベルに引き上げようと、物理、化学、心理学、社会学、美術などの学士を建築家に養成する革新的な組織改革が進んでいた。

というアジ演説をぶって学生に社会学実験を強要した。建築の勉強は、心の安定する環境で行われるべきなのが、かように落ち着きのない敷地なので、地下工事は二カ月で完了し、その上の軸組とレッドウッド葺き屋根も一ヶ月で完成した。外壁と内装工事が始まって、週に一度は現場に行くのだが、工事は問題なく進んでいた。そんななかで、風洞実験を行い、その結果に基づき中庭の空気が乱されぬよう、設計に手を加えた。

住宅の工事が始まったのは翌年の一月だ。

シーランチの現場は大きな岩石をクレーン車で取り除く作業を除けば、障害のない敷地なので、地下工事は二カ月で完了し、その上の軸組とレッドウッド葺き屋根も一ヶ月で完成した。外壁と内装工事が始まって、週に一度は現場に行くのだが、工事は問題なく進んでいた。そんななかで、風洞実験を行い、その結果に基づき中庭の空気が乱されぬよう、設計に手を加えた。

工事担当のホゼはなにゆえか初対面のころから私には親切だった。イリーナがつくったというフランスパンとサラミのサンドイッチの昼食を現場で食べているときに、バスク語の発音は日本語に似ているとか、バスク人たちは昔から日本人に好意を抱いているなどという話を話してくれた。バスク語のいくつかの発音を試され、私が素直に言うとおりにすると、発音が完璧だと言って拍手までするのだ。ホゼは、パッドの親友であるというのだが、この人はパッ

ドとはまったく違って、実に温和な性格なので、現場に通うことで癒される気がした。

ホゼを通して、バスク人という民族がこの世に存在することをはじめ知った。フランスとスペインの国境に住む国を失った民族だというのだ。その後を知る中東のクルド人のような民族なのだろう。

ホゼは建築に大きな愛情を抱いていた。設計意図を十分に理解しているので現場は任せても問題はないのだが、ホゼは毎週のように現場に来てくれと言う。本音はイリーナと私の仲が心配なのかもしれない。

シーランチの住宅は大学の卒業式と同じ時期に竣工した。二ヶ月ほど経った八月初旬に、ヒューズ夫妻からの招待状が届いた。招待状は、平たい箱と共に届けられた。招待状を開け、中身を確認し、箱の包み紙を取り去って、箱の中身を確認すると、それは立派な木製フレームに収められた写真であった。わが設計によるヒューズ邸の写真だった。灰色の外壁と濃紺の海の色に塗られたレッドウッドの屋根は、岩山を背景に、シーランチの大自然の中に溶け込んでいた。雑事に忙殺され、しばらくのあいだ忘れていたわが作品に再会できることに、心から感謝した。

八月の終わりに、私がベルエアーに乗ってシーランチの屋敷を訪れると、ヒューズ氏の車でサンフランシスコから

来たというイリーナとホゼは私の到着を待ちかねていた。

アレックス・ヒューズ氏は言う、
「いやー、遅かったね。イリーナとホゼがイライラして君を待っていたのだよ。よく来てくれたね。君には話したいことが山ほどあってね。ディナーまでまだ時間があるので、座ってゆっくり話そうじゃあないか、というか、我々の話を聞いてくれたまえ。別荘に一週間ほど滞在するつもりで移って来たのがもう二か月も前のことになる。あまりにも住み心地が良くて、チャイナビーチに帰る気がしない。部屋の居心地の良さは今まで経験したことのないものだ。この家には空間のヒュラルキーが確立されていて玄關からホールそして地上から地下へ部屋が重層するさまが奥深さを与えアメリカにはない住空間だと感じた。我々はこの家に来て若かったころの気分を取り戻し新しい生活を始めた。浴室に入ると自然の森の中にいるような感じで深めのバスタブにつかると幸せになる。今までの家には不満を感じてしまった。家の中には今までに味わったことのない濃密なものがかが存在するのだが、それをうまく説明できないのだ」
随所に吹き抜けを配し換気装置を全室に設置した地下階のいきいきとした奇跡の空間はバッドの長年の研究に基づく成果なのだが、夫妻はこれもすっかり私のお陰であると勘違いしていた。
ヒューズ氏は続けた。

ではなく、謙譲な人であったのかもしれないと思ひ始めていた。

米国に来たばかりのころの苦悩の時代に、「謙譲の美德」というものがこの国には通用しないと決めつけたのだが、その考えに変換を余儀なくされた瞬間だった。しかし、ひよっとすると、これはバッド一流のジョークなのかもしれない。

帰りにヒューズ夫妻と抱擁を交わすと、また来てね、と言う夫人は自分の頸に掛けていたタンザナイトのネックレスを記念にと言って私の頸にかけてくれた。濃紺の石は深い海の色だった。
窓を開けて、夫妻と別れの言葉を交わしていると、イリーナがベルエアーの助手席に乗って来た。彼女とホゼの二人をサンフランシスコまで乗せて行く約束なのだ。

海沿いのハイウェイに出ると、イリーナが言った。
「あなたはいいことをしたねえ。建築ってすごいね。人の生活をまるっきり変えてしまうのね。あの人たち今までの生活をすっかりご破算にして新規まき直しの生活を始めたのよ。旦那も浮気から足を洗って新婚みたいな感じになった。無機質な物質で出来た住居が人の心に作用するなんて奇跡だねえ」
「無機質じゃあない、ランバー（木材）は有機質だ」

「地下にある寝室、クローゼット、浴室、洗面所、便所そして大きな納戸には新鮮空気が充滿して呼吸がじつに楽なのだ。吹き抜けから入る陽光が地中にある諸室を明るく照らし、大地に抱かれたような安堵感があって、ストレスから解放された。数ある吹き抜けのお陰で家の一体感を感じていて書斎として使っている。ストーブがあるのでお湯を沸かし手料理も造れる。中庭のスライディングドアは開け放って太平洋の水平線を俯瞰できるが、室内の印象が壊れる気がして今は締め切りのままで使っている。庇があるので雨が降っても座る位置を変えずにすむ。家は人を変える力を持つ、という事実にわれら夫婦は感動し、ここに住むことを決めた。会社には車で通うことにしたが、しばらく休暇を取っている間に、事業は部下が執行し私は報告を受けることでことが足ることに気付いたのだ。緊急時にはヘリを利用すればすむ。チャイナビーチの家には息子夫婦が住む予定だ。もうすぐ初孫の顔が見られるのだよ」

この家が素晴らしい、という賛辞を聞いて、私は、これは自分の功績ではなく、すべてバッドの指導のお陰だと言ったのだが、ヒューズ氏も譲らない。どうやら、この家のオリジナリティに富むところは設計した若者のものであると、バッドが発言したらしいのだ。

バッドは冷酷無比な人と思っていたが、じつは彼がそう

とホゼが言ったけど、イリーナは無視した。

「すべてバッドのアイデアなのに、どの部分に俺は貢献できたのだろう」

「そりゃー、私にもわからないけど、なにかあんなのその日本人らしい繊細な手が作用したのじゃあないの。だってあなたが図面をすべて画いたのでしょう。バッドがこと細かに指示したって、そこまで細かくは決めきれないでしょうが」

「それはそうだ」

とホゼがぼつりと後部座席で重い返事をした。

苦しい時期にイリーナが雑談に応じ援護射撃してくれ、それに加えてホゼの建築工事にかかわる愛情と誠意が成功の鍵だったのだが、その気持ちの口にするとその場の雰囲気壊すような気がして黙っていた。

一時間半も海沿いを走るとマリナー・カウンティを過ぎ、右手に女性のふくよかな胸を想わせるふたつの山が見えた。その山の上から濃い霧が滝のように流れ落ちていた。霧がまさに水流のごとく山から落下して渦巻くさまは巨大な瀑布のようである。

大自然の様に私は敬虔な気持ちになった。

パークレイのアパートに帰り着いてから、約束の三週間の有給休暇をもらいメキシコ旅行に出かけた。一年半に及

ぶきつい役務から解放された気分だった。アメリカとは全く違う風土と気候の中で二十日間ほど過ごし、すっかりリラックスしてパークレイに戻り、気分を一新して次の仕事に取り組みべく、パシフィック・アヴェニューの事務所にかけた。

見慣れた明るい吹き抜け空間のホールから事務所のドアを開けて中に入ると、なぜかイリーナとホゼがそろって出て来てくれた。イリーナは疲れ切ったようすで、バッドが一週間前に心臓まひで突如として亡くなったと言う。二十数年前の戦傷が心臓を弱め、その後の激しい労働によってついに心臓が停止したのだ。

がらんとした玄関ホールに茫然として立ちつくし、イリーナがすこし動くと、三人はしっかりと抱き合った。二人の体温を感じつつも、今にもホールの階段からバッドがパイプを燻らせ顔を出すのではないかと思う。

しばらくして気を取り直し地下の作業室に降り、イリーナの差し出す遺品と手紙を私は受け取った。遺品はパイプとひとつの紙袋だった。

以下はバッドの手紙だ。

「死ぬ前のいつときを利用して私はお前に別れを告げたい。途中でペンを置かねばならないかもしれないが許してほしい。お前と別れるのはつらい。しかしこれは運命なので致し方ない。ひとこと言っておきたいことがある。お前はフ

ランスに行きたいと言っていたが、私が思うにはフランスは因習にこだわりすぎなので、我々建築家に面白いところではない。ヨーロッパで有名な建築家の下で二、三年働くことに意義はあるかもしれないが、日本のような古い国で働くつもりならば早めに帰る方がよい。古い文化の中では下積みの期間も長くなると時間がかかるはずだ。今後のお前の進むべき道を説明しよう。お前は慎重な性格で保守的である。建築の設計にもそれは現れている。作品は地味に過ぎてジャーナリズム受けはしないだろう。若くして売り出すということは考えるな。お前の作品はかなりの歳になつてから目の見ることになるだろう。あきらめないことだ。建築家としての人生を全うしてほしい。仕事の記録はしっかりと残せ。経験と発見を記録し、しかるべき時が来たらそれを公表する。経験から得た貴重な知識を文章で綴るのだ。それがさらなる先への指針になる。現世での名声にこだわらない。ポストユマス・フェイム（死後の名声）を念頭に置いて行動しろ。芸術家の先人たちに学ぶのだ。偉大なる芸術家は存命中に報われることはない。生存中に名誉と権力を手にした人はさほど価値のある仕事はしていない。もう体力の限界だ。ここまでとするが、お前ともう少し一緒に仕事をしたかった。長生きしろ。

バッド・フランシス・ウイスラー」

手紙のほかに、紙袋に入った立派な装丁の教会の写真集

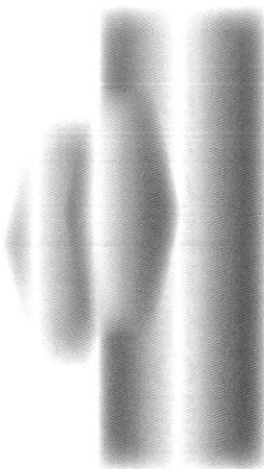
があった。ニューヨーク州北部にあるバッドの最高傑作だということはお前にも聞いていたが、実際に写真集を見るのは初めてだった。

イリーナとホゼは、私が読み終わるや否や手紙を奪い取ったので私は写真集に集中できた。

それは失意の底にある心を救済するほどの素晴らしい建築だった。バッドの理論の結晶ともいえるべき地下空間を有し、地上の木造建築は、写真では伝わらぬ質感を有していることがわかった。

バッドの遺体はこの教会そばの墓地に埋葬されるらしい。私は帰国の決意を固め、帰国前にこの教会を見ることにして、将来への展望を心に描き始めていた。

（「私人」90号より転載）



江平完司

えひらかんじ

1940 東京生まれ
都立西高を経て、米国カリフォルニア大学パークレイ建築学科卒業
ウイスラー・パトリア・ソーシエーツ
松田平田坂本設計事務所勤務を経て独立
建築設計事務所「江平建築事務所」主宰
建築作品／Yahoo! JAPAN 「江平完司」参照
一級建築士
日本建築家協会登録建築家

自由な小説創作の発表の場

「私人」は、朝日カルチャー新宿にある教室が発刊する同人誌です。新宿といえば、都庁とそれに並ぶ高層ビル群を思い浮かべる人が多いでしょう。朝日カルチャー新宿はその高層ビル群の一つにあります。新宿駅から数分、整備された道を歩きます。道のりはコンクリートとアスファルトばかりと思われがちですが、よく見るとホテルの庭や街路樹の緑が灰色の建物群を彩っています。カラスや雀ばかりではなく、シジュウカラやムクドリなどの野鳥のさえずりが聞こえることもあり、都会の自然を感じる事ができます。高層ビルはまわりをさえぎるものがありません。天気の良い日には、教室の窓から富士山を眺められることもあります。そういう場所に「私人」同人は集っています。

同人雑誌は今では珍しい存在になりました。朝日カルチャー新宿でも同人誌を発行している教室はここだけです。「私人」は、朝日カルチャーからの援助はなにも受けずに、受講生だけで運営しています。講師は「私人」に掲載する作品を選んではいませんし、手を加えることもありません。なので、受講生ならだれでも「私人」に作品を発表することができます。受講生の皆さんは自由に小説を書いて、合評を重ねるこ

とで腕を磨いています。講座の名前は「小説作法」といい、講師は尾高修也先生です。尾高先生の著作は多いために、すべてをここにあげることはできませんが、「書くために読む短編小説」とか「必携小説の作法」など、小説を書くかと考える人にとっては、示唆に富む本がたくさんあります。尾高先生は自著を宣伝したりしませんが、熱心な受講生は、これらの本を副読本のようには読んでいます。

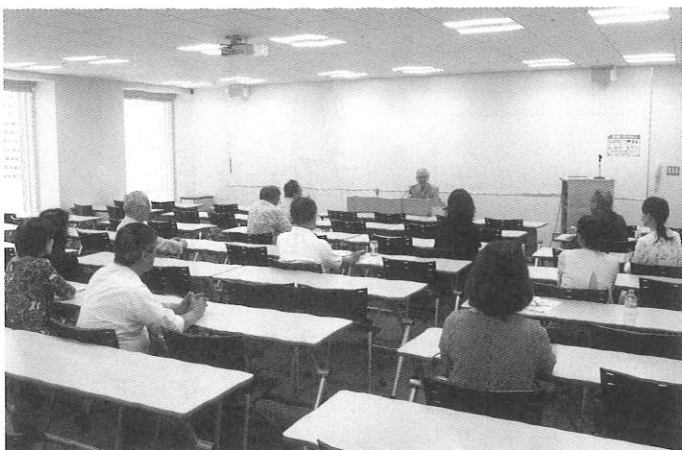
教室は一コマ二時間です。最初の約一時間はプロの作家の短編を、教室の受講者が交代で朗読します。短編は毎回異なる小説を尾高先生が選んでくれたものです。尾高先生のセレクションは幅広く、現在も活躍している作家から、今ではなかなか入手することが難しい作家の作品まであります。それらの小説を先生の解説を聞きながら読むと、いっそう豊かな小説の世界を感じることができるのです。

最近では、村田喜代子「月が明るい夜」、角田光代「ふたり暮らし」や、三浦哲郎「添い寝」、阿部昭「子供のために」、永井龍男「花の下」、田久保英夫「夏野」、水上勉「帯川」などを読みました。阿部昭、永井龍男、田久保英夫のよくな、現代では埋もれそうになっている作家の作品にじっくりと触れることができるのは、文学好きには得難い体験です。表現された世界の奥深さとか、日本語の味いなど、時代が変わっても忘れたくないものが、それらには詰まっている気がします。よい小説は書かれた時代を如実に反映しているの

で、当時と現代を比べることで、今の社会を理解する手掛かりになることもあります。さて、後半の一時間は受講生の小説を皆で合評します。受講生の年齢は高めで、高齢化社会の縮図ともいえそうです。企業をリタイアした人や主婦が多いです。受講生の中には二十年以上通われている人もたくさんいます。新しく入れられた人もいて、教室には常に、緩やかな新陳代謝があります。そのため「私人」に掲載される小説は、毎号出される方のものと、新しく入れられた人が書いたものがまじりあいます。長く書いてきた人の小説と初心者のそれが並ぶことについて、その質のばらつきを心配される人がいるかもしれませんが、たとえまだ未熟な表現であっても、書かれた内容に優れたものがあれば、読む価値はあると思います。若いころから文章修行をされた人の作品には、一日の長というものがあるでしょうし、小説を書き始めて間もない人であっても、会社員としての経験が広い小説世界を作ることもあるでしょう。合評は受講生の皆さんが自由に感想を言い合う時間で、ほめることばかりではありません。おかしいところを指摘されることもあります。自分の作品の合評の日には朝から胸がドキドキしますが、そういう体験も大人になってからはなかなかできないものと、前向きにとらえる人が多いようです。教室の後では講師の先生を囲んで昼食を食べます。その時に、教室では聞けなかったことを、個人的に先生に質問することもできます。食事をとりながら、教室内ではまた違った

意見が交わされることもよくあります。言葉づかいの細かい間違いなどを指摘されるのもこんな時間です。校正ミスはつきものですが、合評を重ねるにつれて減っていきます。しっかりとした日本語がつづれるようになると、成長を感じることがができます。

「私人」の同人はこんな風にな小説を書き、合評をしています。より良い作品を目指して、創作に励んでいます。(森由利子)



尾高先生の教室風景